
アフターコール

みなみもり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アフターコール

【Nコード】

N1261M

【作者名】

みなみもり

【あらすじ】

私こと片桐美弥は19歳の女子大生。事の起こりは半年前の異世界召喚。帰らないでとすがりついた子供の手を振り切り、やっと戻ってこれたと思った次の瞬間再び召喚。

これって嫌がらせ？ と憤る私の目前に立っていたのは、なんだかどえらい男前だった。

帰りたい私と引き留めたい男の攻防的異世界召喚ラブコメディ。

◇1

私、片桐美弥は友人たちから、つくづくあんたには年頃の娘らしい情緒ってもんがない、とよく言われていた。うん、その自覚はある。一応女子らしくあろうと、恋の話だのファッションの話だのに盛り上がるべく努力もしてみただけど、どうにもそういうものに情熱を傾けられない。といって空想の世界に引きこもるわけでもない。

例えば。ある日突然イケメンと称する生き物が現れ、なぜか唐突に熱烈な愛を囁かれる、だとか。

例えば。ある日突然絶世の美少女が現れ、前世私たちは魂の双子だったのよ、とちよっぴり電波じみた台詞をのたまいながら熱く抱擁してくる、だとか。

そういう架空の物語を胸ときめかせて夢中で読む友人たちを眺め、いやいや流石にその話は展開的にありえないじゃないかと思いつつも、それを口に出してしまっただけは無粋の極みだなと常々自重し、日本人らしく曖昧に微笑んでやりすごしていたのだ。

つまり私という人間は、ただの地味女なのだ。日々を穏やかにすごし、ベランダのプランターに咲く花を眺めてほっこりと癒されるのが小さな楽しみという、無害な、毒にも薬にもならない19歳。

なのに何でこうなった。

「ミヤ、半年間お疲れ様」

私の眼前には品のいい初老の紳士。人の良さそうな微笑を浮かべるこの人の名はハロルド・ワース。魔道研究所所長にして、凄腕の召喚士。半年前、私をこのバリバリファンタジー世界に問答無用で召喚した人物だ。

そう、自らありえないじゃないかと断じた架空の物語も真つ青のシチュエーション、コテコテの異世界召喚を私は体験してしまい、半年間ドタバタと過ごし、本日でたくマイワールドに帰還できる事と相成ったのだ。

色々あったが、まあ水に流そう。半年食事と寝床も提供してもらっていたのだから、ここは立つ鳥後を濁さずの精神で行こうじゃないか。私はそんな事を考えながらハロルドさんに頭を下げた。

「お世話になりました」

「こちらこそ。君には本当に色々世話になったね。何だか名残惜しいよ」

「いえいえ、ここはスパッと帰った方が後腐れもないですし」

「はっはっは、そうかね。君らしいな」

「あ、一つだけ。研究熱心なのは宜しいのですが、無差別召喚は控えていただけるとありがたいです。私みたいなのがまた出ないとも限りませんし」

「耳が痛いねえ、気をつけるよ」

やめると言わないということは、またやる気か。

根っから研究者気質のこの紳士は、私を呼ぶ前にも手当たり次第、ありとあらゆるものを召喚しまくっていたらしい。異世界の動物なんかを呼び出して悦に入っているうちはまだ良かったけれど、ついに人を引っ張り寄せてしまったわけだ。つまりそれが私、記念すべき召喚人間第一号。当人的にはまったくもって笑えない。

すったもんだの挙句、半年かけてようやく元の世界に戻る手段を探し出し、今ようやく帰れるのだ。ああ、早く我が家のベッドでごろごろしながら菓子でもパクつきたい。私の心はすでに自宅へ飛んでいる。

「それではそろそろおいとまを」

「ミヤっ!!」

複雑に描かれた魔法陣の上に足を一步踏み入れた時、室内にキラキラしい子供が駆け込んできた。

「アーデイン」

ハロルドさんのお孫さんだ。物心つく前に父母を流行り病で亡くし、研究馬鹿な祖父に育てられてしまったせいで、少々自分の殻に閉じこもり気味の少年。年のころは小学校高学年ぐらい、性格はやや難ありだが、その容姿はマジ天使かと見まごう程の美少年っぷり。初めて見たときは、こんな生き物が実在するのかと口をあんぐりと開けてしまったものだ。

「ミヤ、行かないで!」

アーデインはシルバーブロンドの髪を振り乱し、そのながーいまつげに縁取られた緑色の瞳を潤ませ、力いっぱいすがり付いてきた子供とはいえ、ギユウギユウしめられると正直痛い。

いやあ、まさかこんなに懷かれるとは思ってもみなかった。半年前、初顔合わせしたときは一言も口を聞かず、思いつきり胡散臭いものを見る目で睨まれたものだ、なつかしい。

「いやあ、アーデインの気持ちは嬉しいんだけど。私は向こうの世界の住人だからほら、一度戻っとかないと色々だね」

興奮気味の子供を落ち着かせるってどうすればいいんだ。とりあえず頭なでとこう。おおー、子供の髪はサラサラでいいなあ。

「じゃあ」

しゃくりあげながらアーディンが私の顔を見上げる。いやあ本当美少年。私にシヨタ属性はないからいいものの、この先よからぬ大人にさらわれるんじゃないぞ。

「じゃあ、一回戻ったら、また来てくれる？」

そうきたか。とりあえずアーディンの後ろに立つハロルドさんとアイコンタクトだ。ハロルドさんはアーディンに見えないのをいいことに、苦笑しながら肩をすくめてみせた。よし、狙ったものを再召喚する事は無理、と。

「……えーと。まあ、呼ばれれば」

呼ばれることはないんだけどね。まあ、呼ばれればこちらに抵抗のすべはないわけだし、嘘は言っていない。うん。

「絶対だよ、約束だよ！」

「ほらアーディン、下がりなさい。巻き込まれてしまう」

頃合を見計らってハロルドさんが私からアーディンを引き剥がす。それと同時に魔法陣が輝きだす。ナイスアシスト。

アーディンが泣きながら何か言っているが、もう聞き取れない。徐々に視界が白くなり、私は目を閉じた。さらば、ファンタジーワールド。



「そしてただいま我が家ー！」

目を開けると、そこは懐かしの我が家だった。私は空気を胸一杯に吸い込むと、ガラにもなくハイテンション気味に帰還の雄たけびを上げた。

「さて。問題は、どれくらいこっちで時間経過してるかだけど」

時刻は夕方だが、はたして今日は何月何日なのだろう。

大学に入って一人暮らしのため、新聞なんて気の利いたものとはっていない。向こうと同じだけ時間が経過しているとは思いたくない。冷蔵庫の中身的な意味で。

私は半目になりながら（モロに見るのが精神的にやばそうだったからだ）、冷蔵庫の扉に手をかけた。

「……あ、全然いけるじゃん……こっちじゃそんなに経ってないのかも」

腐海と化し、胞子飛び交う光景を想像しつつ開けた冷蔵庫の品々は、意外にも召喚前と変わらぬ姿でちんまりとその身を横たえていた。

「ええとそうだ、パソコン」

卓上に置いてあるノートPCを開き、電源を入れるとちゃんと動く。よし、電気も止められていない。

適当なニュース系サイトに飛び、日付確認。

「おお……召喚当日！」

私は思わずガッツポーズをとった。まさかの時間経過なし。悪い夢だった、で済まされるレベル。いや、とても夢だとはいえないけ

れど。

何にせよ良かった。向こうでヒーヒーいいながら家事やらされたりした思い出はともかく、こっちの生活が破綻してなくて良かった。正直、大学のレポートやら部屋の家賃やら、考えたくなくて脳内からシャットアウトしていたんだ。

「あー良かった……よし、祝杯だ」

半年飲めなかった炭酸飲料が恋しい。今日は無事の帰還を一人祝うことにしよう。

先程無事を確認した冷蔵庫を鼻歌交じりに開け、冷やしてあったジンジャーエールを取り出す。風呂上りの親父よろしく一気飲みとしゃれこもうじゃないか。仁王立ちでプルトップを引き、シュワシュワした液体を一気にのどに流し込んで、カーッと声を上げる。誰も見ていない時の女なんてこんなものだ。

「お疲れ、私!!」

缶を掲げ、空中にむかって乾杯。

その姿勢のまま、私の視界は真っ白に染まった。



私は目を閉じたまま、掲げたジンジャーエールの缶をゆっくりと降ろした。くそう、よりにもよってこんな間抜けポーズの時に。

ハロルドさんの嘘つき。狙って呼び出すことは出来ないって前言ってた癖に。しかも送り返して即呼び出しか嫌がらせレベルじゃないか。元の世界にいたの、10分くらいだよ。

さんざん心の中で毒づいて気が済んだので、私はようやく目を開

けた。

「……あれ」

どこだここ。私が立っているのは、馴染みのあるハロルドさんの研究室ではなかった。そして、目の前に立っている、私を召喚したとおぼしき人物もハロルドさんじゃなかった。誰この人。

「……ミ……」

なんというか、どえらい男前。すらりと高い身長、均整のとれた体躯。その顔も、瞳は涼やか眉毛はキリリ、鼻筋はすっと通って唇の形も非常によろしい。CGですか？ と聞きたくなるレベルだ。こんなすごい男前、写真の一つでもとって友人に見せれば大喜びされるだろうに。

あ、目が合った。

「ミヤ!!」

抱きつかれた。

「ちょっと、何するんですか！ 出会い頭にセクハラとか、いくら見目が麗しかろうとやっちゃんいけないんじゃないでしょうか人として！」

「ミヤ、俺が分からないか!？」

「は？」

男前氏はそういうと、ずいど顔を私に寄せた。ちょ、近い近い。うわ、まつげ長ー。ちょっとそのまつげは男にはもったいない、私に寄越しなさい。

「確かにあの頃俺はチビだったから、分からなくても仕方ないか。
アーデインだ」

「……………えー!？」

確かに目の前にあるその目は緑で、髪もシルバーブロンドだ。

でもいくらファンタジーでもこれはない。だって10分前には天使のような相貌でうるうると瞳を潤ませていた子供が、いきなり凛々しい男前に変身って。変身ヒーローも裸足で逃げ出すわ。しかもどう見ても私より年上に見えるんだけど。どんだけ急成長だ。

「いや、だってさっきまで子供だったんじゃ」

「ミヤの世界とこちらとでは流れる時の速度が大幅に違う。ミヤを送り出した後、祖父について召喚術を徹底的に学び、ミヤをもう一度呼び寄せる手段を開発するのに15年かかった」

「15……って、失礼ですけど今お幾つで……」

「26になった」

7つ年下だったはずなのに10分で7つ年上ですか。

「あーりーえーなーいー……!!!!」

◇2

落ち着け私。ここで取り乱しても話は進まない。

深呼吸を数回繰り返してビジュアル的ショックから気合で立ち直る。冷静になった頭で今の状況を整理すると、じわじわと疑問点が浮かび上がってきた。ので率直に聞くことにする。

「……百歩譲ってあなたがアーディンだという事は認めるとしても、なんで今更私を呼んだの？ そっちじゃ15年も前の話でしょ、子供って割とすぐそういうの吹っ切れちゃうと思うんだけど。私が帰って二、三ヶ月くらいの間の話なら、まあ呼ばれたのも分からなくはないけど」

確かにあの半年間で、それなりに仲良くなっていたと思う。あの意味母親代わりのような感じだったし、私がいなくなって寂しかったのも理解できないことはない。

でも、大人になっていく過程で、その辺は吹っ切るのが普通な気がする。ちよっと仲良くなったお姉さん呼び戻すだけに15年て、どんだけ粘着質なんだという話だ。そこまで執着されるようなことはした覚えがない。むしろ、ニンジン拒絶するアーディンの頭を引っぱたいて無理やり食べさせたりしてたんだから、恨まれてもおかしくない。

私がそう突っ込むと、アーディンはグっと言葉に詰まり、目尻をほんのり赤くした。ん？

「それはっ……」

整った眉がかすかにハの字に歪められ、私を見ていた視線が部屋の隅へと移動する。おーい、ちよっと目が潤んでないか。

待て待て、なんだこの空気。イヤゝな予感がする。私はその手の方面に興味が湧かない性質だが、興味がないだけで理解できないわけじゃない。つまり、そういう空気は普通に読める方だ。

「ミヤにとっては、俺はただの手がかかる子供だったのかもしれない。だが、俺はミヤを母親代わりだなんて思ってたなかった」

「えー、あんなに世話焼いてあげたのにやっぱりよそ者扱い？　アーディン冷たい！」

「どうしてそうなる！」

答え、意図的にはぐらかしてるから。

さてどうする。こっちは無意識とはいえ、まさかあの天使の心ががちりキヤツチしていようとは思わなかった。改めて思い返せば、私が帰る間際にはやたらまとわりつかれたり絡まれたりくつつかれたりしてた気がする。ああようやく懐いてくれたなあ、などとのんきに感慨に浸っていたあの頃の自分を蹴り飛ばしたい。相手は子供なりにしっかり下心があったんじゃないか。見てくれが純真そのものだったから、うっかり騙された。

「それは冗談として。いやあ知らなかった、アーディンで年上好きだったんだ」

「……っ」

ぶわっと効果音がつきそうな勢いで赤面する人を初めて見た。色素薄いから首まで赤い。それにしても、26歳でその反応は純情すぎやしないか。

「でもほら、私年下になっちゃったし。アーディンの守備範囲外だねえ、うん。いやあ残念残念」

「な」

おお、今度は蒼白になった。こんなに急に血流変化させて大丈夫なんだろうか。そうさせてる私が言うのもあれだけど。

誤解のないように言っておくが、私は男心を手のひらの上で弄び、愉悅に浸る悪女気分を味わって楽しんでる訳ではない。どうしても駄目なのだ、こういう色恋沙汰が。あからさまに好意を向けられると、背筋がムズムズして逃げ出したくなってしまうのだ。

「そういう訳だから私は帰」

「帰らせない」

低い声と同時にがしりと拘束された。

私は自分の両腕をしっかりと捕まえる大きな手を見た。振り払おうとしても、うんともすんともいわない。アーディンの顔を見上げると、なんだか目が据わっていらっしやる。これは展開的にやばいんじゃないだろうか。

「15年前の俺は、子供だったからミヤには相手にはされないと勝手に諦めてた」

ぐぐぐと顔が寄せられる。私は捕まえられて全く動けない。子供の頃ならこっちも押し負けたりはしなかったが、なんたる馬鹿力。こんなとこだけ大人にならなくていい！

「だが今なら問題なく、むしろ釣り合いが取れると思わないか」

思わない！ 思わないよ！！

うああああ、ゾワゾワする！！ 耳元でいい声使って囁くんじやない！！ 純情すぎるとか言ってすいませんでした！！ 狼モ―ド解除してください！！！！

この動悸はときめきなんて可愛らしいものではなくパニックだ。だってしょうがないじゃないか、自慢じゃないが私はこういう経験値が0に等しいんだから。いくら相手が超絶美形でも強引に迫られては、キャッキャウフフしようだなんて気分にはならず恐怖心が先にたつ。

「は、離……」

声も裏返ろうというものだ。

だがそれが更にアーデインの何かを煽ってしまったらしく、離してくれるところかガツチリ抱擁にシフトチェンジされた。私の脳内では剣の舞がBGMとして鳴り響き、もはや現実逃避をはじめている。

顎を固定され、あわやお互いの唇が触れ合わんとしたその時。

バシーン！　　といい音がして、アーデインの頭が斜め横に逸れた。

「何やってんですか所長。研究室に女の子連れ込むとか、気でも狂いましたか」

窮地に射した一筋の光。我が救世主は、分厚い書類をフルスイングした状態からゆっくりと元の姿勢に戻った。

どうやら見た感じ、研究所の職員さんのようだ。とにもかくにも助かった。今だけは神様の存在を信じてもいい。明日には忘れるけど。

「あれ、見ない顔だな。どこから連れて来たんです？」

異世界からです。とはさすがに言えなくて、私はただ口をパクパクとさせた。

よく見ると職員さんも結構いい男だった。アーディンがキラッキラした感じの華麗な美貌だとしたら、こっちは青空の下大きい犬と戯れてる、白い歯眩しいさわやかタイプとでもいおうか。腹は黒そうだが。

いやそうじゃなくて、もっと引かかる事言わなかったか、この人。

「……所長？ 魔道研究所の？」
「そうだ」

地の底を這うような声が私の側で返事をした。ひいつ。盛り上がってる途中に水を差された男がどうなるか、不幸にも私は知らない。だが確実にご機嫌麗しいわけではない事ぐらいは想像がつく。ここは全力でこの流れを変えるのが私に課せられたミッシェンだと思う。

「アーディンが所長？ そ、それってハロルドさんは？」
「5年前に隠居した。田舎に引きこもって趣味の研究に没頭してるさ」

つまり研究所の管理がいい加減面倒になって、程よく成長した孫に全部押し付けて、自分は研究三昧ということか。

アーディンは姿勢を立て直すと、職員さんの方に顔だけ向けた。

「入って来るなと言っておいた筈だが」

怖っ！ 発した台詞は普通でも、その声音がとんでもなく怖い。もう声だけで人が殺せてもおかしくない。けれど職員さんは慣れているのか、何事もなかったかのようにけろりとしている。こやつ、

できる。

「一、二時間ならともかく半日部屋に閉じこもられちゃ、こっちの仕事も滞るんですよ。さっさと溜まってる書類に承認のサイン下さい」

まさかアーディン、勤務中に仕事放り出して私を召喚したのか！それは何というか、色々駄目な大人だぞ！

私が非難の入り混じった目で見ている事に気づいたアーディンは、ボソボソと小さく呟いた。

「……今日の午前中でないと術的に呼べなかったんだ、しょうがないだろう」

「呼ぶって、まさか所長、その子召喚しちゃったんですか！」

「だから何だ。この人は特別だ」

「何いってんです、駄目に決まってるでしょう！早く帰してあげなさい！」

「嫌だ!!！」

なんだこの、捨て猫を拾ってきた子供とお母さんみたいなやり取りは。しかも駄々をこねてる方が偉い人ってどうなんだ。

飼えないから捨ててらっしゃいと言われた子の如く、アーディンは私をぎゅうと抱きしめた。ぐえ。子供だったら微笑ましいで済むが、大人の男が全力でやるんじゃない。これ、図体は大きくなったが、中身は小さな頃とあまり変わらないんじゃないだろうか。

そこまで考えた私は、ふと思いついた事を実行に移してみた。

「アーディン、離して」

「ミヤまでそんな事を言うのか」

「いいから離しなさい。……言うこと聞かないと、嫌いになるよ！」

「!?!」

効果はてきめん。流石に子供の頃のように、ごめんなさいと泣いて縋ってくる事はなかったが、弾かれたように私から一歩離れてくれた。やれやれ。

「あー体が痛い。もっと早くこうすればよかった」

「……ミ……」

「ちゃんと仕事しなさい！ 自分の責任を放り出す人間は最低だつて教えたでしょう！」

びしりと綺麗な顔に指を突き立てそう言うと、アーディンは直立不動の姿勢になった。若干19の小娘である私が、いい大人になったアーディンに偉そうな事を言える立場ではないのだが。ここは場を収める為だ、仕方ない。

「あー、喉かわいた……」

それにしても、パニックになったり怒鳴ったりですっかり喉がカラカラだ。どこかで水分を補給せねば。15年前と間取りが変わっていないければ、研究所内は勝手知ったる庭のようなものだ。たしか休憩室に備え付けの給湯器があるはずだ。

私は喉の渴きを癒すべく、固まっているアーディンを放置して部屋を出た。

◇3

「おおい、待って待って！」

休憩室を目指して歩いていると、背後からさっきの職員さんが追いかけてきたので立ち止まって迎える。放っておくと迷子になるんでも思われたんだろうか。

「どうもお疲れ様です。お仕事忙しそうなのにいいんですか、私なんかの相手しなくても大丈夫ですよ」

私がそう言うと、職員さんは苦笑しながら頭を掻いた。茶色い髪が柔らかそうだ。

「まあそうなんだけどね。所長が書類片付ける間、君がどこか行かないように見てろって言われちゃったから。この際思う存分休憩しようかと思って」

「そんな事に部下使うとか、職権乱用……」

「あれでも普段は優秀なんだけどねえ。何だか目の色変わってて、流石に突っ込めなかった」

優秀だったのか。確かに冷静に考えて見ると、20代で所長とかとんでもない気がする。親……じゃない、祖父の七光りとかでも普通は周りが納得しないだろうし。ということは本当に有能なのか……人間性に問題ありそうだけど。

この際、この人から色々と情報を得ておこう。15年分の空白を埋めておきたい。

「まあ立ち話もなんですし、お茶でも飲みながら話しませんか」

「それはいいね。僕も色々話がしたい」

休憩室に着くと、職員さんはさりげなく私が座る椅子を引いてくれる。普通の娘がこんな扱いされたら、うっかりときめいてしまふんだらうなあ。私は残念な娘なので適応外だが。

「どうもありがとうございます」

「どういたしまして。ところで君、どこから召喚されてきたの」

「ああー、その辺説明しますますか」

私たちは茶をすすりながら、お互いの自己紹介と状況説明をした。職員さんの名前はジョセフ。アーディンと同期で研究所に入ったらしいが、今はアーディンの秘書のような事をやっていると説明してくれた。一応アーディンの方が役職的に上なので、勤務中は丁寧な口調で接しているようだったが、実際のところは友人らしい。

「実は学生時代からの腐れ縁なんだよ。秘書なんて面倒なもの、辞退しようと思ったんだけどね。奴を御せる人間って限られてて。結局僕が受けるはめになっちゃった」

問題児扱いじゃないかアーディン。頭はキレるけど、人の言うこととかかないタイプだもんなあ……大人になって、社会適合して多少は丸くなったのかと思ってたけど、その辺は変わってないらしい。

「それは、なんていうか色々とお疲れ様です」

「あはは、もう慣れたけどね。……だから、尚更さっきのには驚かされた」

「さっきのですか」

「君に嫌いになるって言われたただけであの反応だろ。実は爆笑を耐えるので腹筋がかなり辛かった」

ジョセフさんはニヤニヤと人の悪そうな笑みを浮かべた。ああ、爽やかそうなマスクが台無しだ。でも多分これがこの人の素なんだろう。しかしあの時、この人は顔色一つ変えてなかったのに、実際は必死で笑いをこらえてたのか。侮れない。

「いやあ面白かったね。あいつ、見てくれがアレだから大抵女の子の方から寄ってくるんだよ。その点に関しては苦労知らずと言っているね。自分から追っかけた事、ないんじゃないかなあ」
「うわあ」

私の中でアーデインの立ち位置が豪快にランクダウンしたが、誰が私を責められよう。

珍妙な顔で話を聞いていた私を見てフォローすべきと思ったのか、ジョセフさんが少し真面目な顔をした。

「あ、でも一応あいつの名誉のために言っとくと、僕の知る限りじや全然相手にしてなかった。ていうか寄って来るなって感じで冷たい対応しかしてなかったな。研究所内の女の子とかさー大変だったよ、機嫌そこねちゃって。僕がその辺の人間関係を円滑にしなきゃいけないくて、胃に穴あきそうだった。お前ら外でやれて感じだよ
ね」

全然フォローになってない。

「アーデイン、まだ人間不信気味なの治っていないんだ……まさか全然内面が成長してないんじゃない……」

「そうか。君、15年ぶりに呼び戻されたんだっけ。なるほどー。君があいつの運命の人かー」

ジョセフさんの爆弾発言にブハっと思い切り茶を吹いた。ああごめんなさい、卓上が惨憺たる有様に。……しかし運命の人ってなんだそれ。アーディンめ、そんな事あっちこっちで吹聴して回っているようなら、少々制裁を加えねばなるまい。

「そんなふざけた事言っていましたか、アーディン」

「いや命名は僕だけど。あいつ学生時代に、鬼気迫る勢いで勉強し続けてぶっ倒れたことがあって。何をそこまで必死になってるんだって聞いたら、熱っぽい目で、どうしても呼び戻したい人がいるんだって」

うわあああ、やめてええ。むず痒くてじっと聞いていられない、どんな拷問だこれ。もう耳を押さえて叫びながら走り回りたい。っていうかジョセフさんのセンスですか運命呼ばわり。

「あーこれは相当いかれてるなと思って、どんな人なんだって聞いたら」

「分かりました！　もういいです!!」

えーいい所なのにーなどと残念そうな声を上げるジョセフさんを黙殺する。これを聞かされ続けるぐらいなら、自分の恥ずかしい過去を暴露される方がまだましだ。

ジョセフさんは、一旦引っ込めていたニヤニヤ笑いを再び浮かべ、私を見つめた。

「どんだけだよって思ったけど、君見てるとなんとなく分かるなあ。何か構い倒したくなる空気があるよね」

「嬉しくないんですが、その評価」

「飄々としての割に隙だらけというか。達観してるようで実は初心な感じが男心を絶妙にくすぐるというか。これで年上だったと

か、手料理食わせてもらってたとか、そりゃああいつもコロつくよねって」

ぞわっと腕に鳥肌が立った。

何だこの人！ 分かっててわざとやってるだろう！ 現に私の反応みて喜んでるあたり、絶対S属性だ！

「それ以上言ったら飛んで逃げますよ」

「一応見張つとけて言われてる手前、それはまずいなあ。じゃあこの話はここまでにしよう、残念だなあ」

私が精一杯の抵抗を見せると、ジョセフさんは肩をすくめてふわりと微笑み、ようやく話を打ち切ってくれた。まさに虫も殺さぬ笑顔で。アーディンよりよっぽど曲者なんじゃないのかこの人。少なくとも私の苦手なタイプには違いない。

「……なんだかどつと疲れた……」

「あははは。よっぽどこういう話苦手なんだねえ、あいつも報われないなあ。あ、もう一杯お茶飲む？」

「いえ、もう結構です……」

その後もジョセフさんはにこにこ笑みを崩さず、私の世界の話などを興味深げに聞いていた。ちよつと油断すると、すぐ私をからかう方向へと行くので、話す内容には細心の注意を払った。

「へええ、魔法のない世界なんだ。不便そうだけど」

「そうでもないです。それを補って余りある技術があるので。明かりの魔法の変わりに電気とか」

「電気？」

「なんていうか、ものを動かすエネルギーとでも言えбайいんでし

ようか。例えば……」

無難に、無難に。餌を与えないように。
薄氷を踏んで渡るような、精神力を要する会話は、数時間に及んだ。

私的にはもうクタクタに疲れる会話だったのだが、傍目には和氣藹々と楽しく盛り上がっているように見えたらしい。

「……楽しそうだな」

地獄の釜を開いたらこんな声が聞こえるんじゃないかというような、魂も凍る低音が背後から響き、私はギシリと固まった。

「お、所長。思ったより早かったじゃないですか、残業になるかと思ったのに。偉い偉い」

しかしジョセフさんは、真っ向から吹き付けられるブリザードを華麗に受け流し、何事もなかったかのように立ち上がった。さすがアーデインの手綱を握る男。それにしても残業って、どんだけ仕事渡したんだ。

「書類はどちらに？」

「お前のデスクの上に置いてきたから確認しておけ。………ミヤ」
「な、何？」

なんで最後二文字だけ声音をガラリと変えるんだ！ 甘い！！
耳のうしろがチリチリする！！

「今日の仕事は全部済ませた。一緒に帰ろう」
「帰……」

しまった。今の今まで失念していた。

ハロルドさんが田舎に隠居してしまったということは、私に安住の地がないということだ。アーデインは当たり前のように私を自宅へ連れて帰るつもりらしいが、のこのことついて行こうものならどうなるか、ちよつと考えれば馬鹿でも分かる。

「いや、私は宿に行くから」

「なんで！ ミヤが使ってた部屋は使えるようにしてあるのに！！」
「あの時と状況が違うから。老人と子供が住む家に娘が泊まるのと、若い男が住む家に娘が泊まるのと、危険度が段違いでしょうが！」

私が指摘すると、アーデインはなんとも微妙な顔をした。

「何その顔。何か言いたいことでもあるの？」

「いや……信用されていないのはショックではあるんだが……ちゃんと男扱いしてくれているのは嬉しいというか……」

「絶対宿に行く！！！！！！」

そこ喜ぶところじゃないから！

◇4

私とアーデインの応酬を横で見ていたジョセフさんが、まあまあと割って入ってきた。

「気持ちわかるけど、現実的な問題としては、いつまでも宿に泊まり続ける訳にはいかないんじゃないかなあ？ 結構な出費になるよ。どれくらいこっちに居る予定なのかは知らないけど」

うっ、痛いところを突いてきた。よく考えたら、私はこっちのお金を持ってない。元の世界に戻るときに、全額ハロルドさんに渡してしまったのだ。さすがにこの状況でお金貸して下さいとは、とても言えない。

「じ……じゃあ今すぐあっちの世界に戻りますから」

「帰さないと言っている！」

「だったら野宿を」

「誰がそんな事させるか!!」

私が発言するとすかさず反応するアーデイン。ちょっと大声はやめなさい、今日一日のお仕事を終えて帰途につこうとしている研究所の人たちがチラチラチラこっちを見ているじゃないか。こんな風に注目浴びちゃったら、後で絶対面倒くさいことになるのだからないのか。

ヒートアップするアーデインに私もテンションが引きずられ、頭に血がのぼってきた。好いてくれているのを悪し様に言うのはあれだが……ああもうぶっちゃけ面倒くさいんだよ!!

「じゃあどうしろっていうのよ!!」

「僕ん家来る？」

ここでジョセフさんが”オヤツ食べる？”とでも言うような軽い口調と共に爆弾投下。

シーンと辺り一面に沈黙が訪れた。向こうの方で談笑してた女性研究員さんたちも黙った。ってあんたら、こっちの話聞いてたんかい。

私はギギと油の切れたロボットのよう^にに首を軋ませ、ジョセフさんの方に向けた。そこには、微塵も悪意を感じさせない爽やかな微笑があつた。

「僕の住居なら両親と妹がいるから安心だよ。それに君の話、面白いからもうちょつと聞きたいんだよね」

なんでこのタイミングでそういうことを言いだすのかこの人は。これは罠だ。罠に違いない。選択肢に地獄への道が一本増えただけだ。だがまて、確かに安全性はこっちの方が高いのかもしれない。即手を出してきそうなアーディンと違って、オモチャにはされても襲われる可能性は低そう^だ。そうか、ご両親を盾にすればなんとかなるかもしれない。

と。

姑息な事を考えている私の片手を、やんわりとジョセフさんが握った。

「それに、君と個人的に仲良くなれる絶好のチャンスだと思うしね」

「あんたもか!!」

私がそう叫ぶよりも早く、後ろからアーディンの腕が伸びてきてジョセフさんの手をべしりと叩き落とし、そのまま私の肩を掴んでぐいと引き寄せた。

「絶っっ対貴様には渡さん!!!!!!」

アーディンは鬼気迫る表情で捨て台詞を吐くと、そのまま私を抱き上げて走り出した。ここでまさかの退却である。普通はパンチの一発でも入れるんじゃないのか展開的に。さすが子供の頃からインドア派、ここぞというときに後ろに下がる男。

私はアーディンの肩越しに、遠ざかるジョセフさんを見た。

視界に入ったジョセフさんは、腹を抱えて笑っていた。

……あの野郎。さっきの行動はアーディンをからかう為だけにやったのか。今度会ったら、お茶に酔入れて飲ませてやるから覚えていろ。



で。

結局私は、15年前にもお世話になっていた、馴染み深い家まで連れて来られてしまった訳で。

玄関に入ると、アーディンはそっと私を降ろし、気まずそうに3歩離れた。

「アーディン？」

何だその微妙な距離は。

私が見上げると、アーディンは、その整った顔にフッと憂いの表

情を浮かべた。さすが見た目だけは極上の男、背中に花でも背負ってそんな勢いだ。中身は残念極まりないが。

「その……悪かった」

「それは一体何に対しての謝罪なわけよ」

思い当たる節が多すぎて思わず聞き返してしまった。

「いや、だから……最初から最後まで、色々と暴走した。反省してる」

「おお、反省って単語がアーデインの口から出るなんて。無駄に年取ったわけじゃないんだねえ、お母さんは嬉しいよ」

「だからミヤのことは母親だとは思っていないと」

「あーそこは譲れないんだ……」

それにしてもこの家、変わっていない。勿論15年分経年劣化はしているが、家具の配置なんかそのままだ。本当なら懐かしいなあなどと感慨に耽るものなのかもしれないが、私としては昨日までここに住んでいて、今日もう一回訪れてみたらいきなり家が古くなっていた感じなのだ。懐かしさなど感じようはずもなく、ひたすら現実感がない。

「今、アーデイン一人で住んでるんでしょ？ 家事とかどうしてるの」

「週に何度か、通いの家政婦を雇っている。俺一人だから、それほど汚れもしないし」

「ああなるほど」

以前私が召喚された時も最初はそんな感じだったな。で、私がタダ飯食らうのが心苦しくて、家事手伝いを申し出たんだった。普通

異世界召喚された主人公って、世界の運命握ってるとか、王族の相續争いに巻き込まれるだとか、そういう派手なものがデフォルトじゃないのか。呼び出されて、ただただ家事やってただけって何なんだ私。

「もう来ちゃったものはしょうがないし、今日のところは部屋使わせてもらう事にする。今からじゃ宿も探せないから」

ドタバタしてるうちに日も暮れてしまった。気は進まないが仕方ない。

一応アーディンも冷静になったようだし、こちらから刺激しなければ、一晩くらいなんとかなるだろう。明日からのことは日が昇ってから考えることにしよう。

それよりも、だ。

「今早急に解決すべき最大の問題は、この空腹感だと思う」

あえて描写していなかったが、私の腹は先程から激しく音をたて、エネルギー補給の必要性を訴えていた。夕方にこっちに呼ばれ、それから半日以上ジョセフさんと話してたのだ。その間腹に入れたのは水分だけ。そうとも、私は腹が減っているんだ！

「あ、ああ……何か食いに出るか」

「うーん、今から出るの面倒くさい。ってアーディンいつも外食してるの？ 良くないよそれ」

「そう言われても、一人だどうしてもそうなる。家政婦が来る日は夕食も作り置きしてもらっているが」

「この駄目男め。今日び男でも家事くらい自分でできなくてどうする」

「うっ」

アーディンは顔を引きつらせて口をつぐんだ。

まあ私の世界でも、家事出来る男や逆に出来ない女はいるけど。

アーディンの場合、見た目が完璧すぎるせいで駄目な部分が悪目立ちするんだな。

まあいくらそんな事を追求したところで、この空腹感が治まるわけでもない。ここは自分で何とかするしかないか。

私は袖をまくり上げながら台所へと足を向けた。

「作り置きしてくれるってことは食材は置いてあるんだよね。しょうがない、何か適当に作る」

「！」

アーディンに犬の耳でもついてれば、ピーン！と立った感じだろう。もしくは猫缶開けてもらう時の猫か。でかい図体で私の後ろを8の字にウロウロするんじゃない。

「作ってくれるのか！」

「期待しないように。大体なんの材料があるのかもわからないし」

「でも、ミヤの料理だ！」

その顔で無駄に笑顔全開するのはやめなさい、ちょっと可愛い奴だとか思ってしまうじゃないか。

私は特別料理が上手いってわけではない。並だ。失敗することだってある。だが、こっちの世界に召喚され、上達せざるを得なくなつた。

なにしろこっちの料理は口に合わないってレベルではなかったのだ。とにかく火が通ってりゃOK的なそれらが食卓に並ぶのを見たときは、食を尊ぶ日本人として絶望を覚えたものだ。私の味覚がこ

の世界の人間と違うのだろうかとも思ったが、単にこっちの人はそれしか知らないから何の疑問もなく食べているだけだった。そりゃー塩茹でしただけのにんじんとかブロッコリーばかり食べさせられれば、野菜嫌いの子供もできあがろうってものだ。

少々こげた出汁巻き卵を食べさせたときのハロルドさんとアーディンは見ものだったなあ。懐かしい。

「菜っ葉と根菜とキノコと……鳥肉か。これは鍋フラグ」

食材確認してメニューは決定。鍋だ鍋。材料全部ぶち込むだけで美味しい。作る手間もほとんどかからない。昆布がないのが残念だが、鳥の骨でもいれておけばダシにはなるだろう。

私が適当に材料を切る間、アーディンは、子供の頃と同じ顔をしてこちらをじっと見ていた。視点は見上げていた状態から見下ろす状態に変わったが、他は何も変わらない。なんとも不思議な感じだ。

「アーディン、そこに居られると結構邪魔なんだけど」

子供だったらまだいいが、でかい男に側で立たれるとすごく動きにくい。しっしと片手で追い払うと、アーディンはムツとなった。

「ミヤ、そっけなさに磨きがかかってないか。そんなに俺が邪魔か」

「そういわれても、育ちすぎてるアーディンが悪い」

「な……好きでこうなったわけじゃ」

「はいはい、いい子だからちよつとそっちいっててねー」

「ミヤ！」

アーディンの声色が変わり、腕を掴まれた。しまった、地雷を踏んだ。

「子供扱いしないでくれ。俺はもう、子供じゃない」

「ちょ、アーディン！ 刃物持ってるんだから危ない！」

空いているほうの手でむんずと包丁を取り上げられた。うわあああ、何でこの程度のことでスイッチ入るんだこの男！

「これで問題ないだろう」

「問題なくない！ 料理、料理しないと」

「後でいい。俺がちゃんと大人だってことを分かってもらわないと」
「嫌って程分かってるから！」

またこの展開か！ だが今度の舞台は家屋、他人の介入は絶望的。どうする私、あまりやりたくないがここは股座でも蹴り上げて……。

カランカラン。

絶妙のタイミングで、来客を告げる鐘の音が響いた。グッジョブ
見知らぬ来客！

「お客さんだ、出なくちゃ！」

「あ、ミヤ！」

アーディンが気を緩めた一瞬の隙を突き、その手から逃れて私は
玄関に走った。あー良かった、超助かった。

「はい、お待たせしました」

「えへ、来ちゃった」

扉を開けたそこには、先程さんざん人をからかってくれた爽やか

な微笑があつた。ぎゃあ！

◇5

「何しに来た！」

私を追って玄関に来たアーディンが、ジョセフさんを見るなり眉毛を吊り上げて怒鳴りつけた。私の気持ちを代弁してくれてありがたい。本当に何しに来たんだジョセフさん、毎度毎度の神タイミングなのは感謝するけど、その真意を知るのは恐ろしい。

例によってアーディンの怒りの波動をスルリと流し、ジョセフさんは足取りも軽く家の中に入ってきた。

「そう怒るなよー。折角の噂の手料理、ご相伴に預かれるチャンスなんだから。これはもう来るしかないじゃないか」

「……噂？」

私がゆっくりと振り返ると、アーディンがぶんぶん顔を左右に振っていた。

「言いふらした訳じゃない！ 昔………ちよつと、こいつに話しただけだ」

「学生時代、学食で昼メシ食う度に言ってたよねえ。”こんなの不味くて食えない、ミヤの料理が食いたい。味が全然違うんだ”って。それ横で聞いてた女子生徒が学校中に広めてたぞ。アーディン様を落とすには、料理の腕が必須だとかいって」

「ちょ」

「何だそれは、初耳だぞ！」

「だってお前に教えちゃったら面白くないじゃないか。知ったら火消しに走るだろ」

あわてて詰め寄るアーディンを、ジョセフさんは嬉しそうに笑い飛ばした。本当に友達同士なのかあんたら。それにしてもこの人、タチが悪すぎる。愉快犯ってレベルじゃない。

「まあそれで、割と興味あったんだよね。人見知りするこいつを、胃袋で掴んだ女性とその料理」

「胃袋で掴むとか、ホラーみたいな言い回しやめてくれませんか」

「一応手土産も持ってきたからさ。ほらほら、お菓子だよ」

ジョセフさんは、その手に提げていた包みを大げさなゼスチャーで捧げ持ち、私に近寄ってきた。

「……一応アーディンのブレーキ役だから、僕は。奴が暴走する前に止めてあげよう。有難いだろう？」

そして後半の台詞を小さく耳元で告げるとニヤリと笑った。えーと。

「……とりあえず、具材増やすわ」

「わーい、楽しみだなあ」

「お前、厚かましいぞ！」

まあ、あれだ。急に人数増えても対応できるメニューでよかった。



「アーディン、これ机の上に運んで」
「分かった」

さすがにこつちの世界に土鍋はない。というわけで代用品として大きい金属鍋を使っている。具が山盛り入っていてとても女の私には持ち上げられないので、ここは立派に育ったアーディンをこき使う事にする。こういう時ばかりは男手万歳だ。

「僕も何か運ぼうか」

そつのないジョセフさんが、絶妙なタイミングで助力を申し出た。本当に気が利くな、この人。だから秘書とか務まるんだろう。

「じゃあ、みんなの分の取り皿持ってってください」

「スプーンも持っていくね」

ひよいひよい、と他にも必要そうなものを勝手に判断して持っていつてくれる。これは結構ポイント高い。まあ、それらを凌駕するマイナスポイントが性格の方にあるんだけど。

鍋と食器類を運んでしまえば、もう後は食べるだけだ。全員着席。ぐつぐつ煮える鍋を興味深げに眺めていたジョセフさんが歓声を上げる。

「うわあ何これ、いい香り」

「何といわれると、適当鍋としか」

目に付いたものの適当に切って入れてるだけだし。味付けも特に凝ったことはしていない。鍋は具材から出るうまみが全てだ。

「適当に煮えたやつから取って食べてください。食べた分新しい具を足す感じで」

「了解」

「アーディン、肉だけ選り分けて食べてたらぶっ飛ばすから」
「なっ、流石にもうそんな事はしない！」

私が今までのクセでそう言うと、アーディンは赤面して反論した。半年かけて野菜嫌いを克服させた甲斐があったか、今のアーディンは好き嫌いがなくなったようだ。結構結構。

さて、私もこの空きっ腹を満たす作業に集中しよう。

気が付くと、全員無言でひたすら鍋をつついていた。

普通、鍋を囲んだら話が弾むもんじゃないのか。なんで全員食べるのに必死なんだ。アーディンはともかく、ジョセフさんまで沈黙したままモグモグやっているのが意外だ。言語に絶する不味さなんだったら困るし、一応聞いておくか。

「お口には合いましたか」

「ん！？ あー、うん。ごめんごめん、言葉忘れちゃってた」

声をかけると、ジョセフさんは我に返ったように一息ついて苦笑した。

「いやあこれは美味しいよ。アーディンの言うこと、実は話半分に聞いてたんだよね。惚れた弱みで評価の底上げしてるんじゃないかって」

「ジョセフお前、それは聞き捨てならんぞ！」

「あははご免って。だからちゃんと訂正してるじゃないか」

「それはこっちの世界の料理の基準がアレなだけで。この程度でそんなに感動できるんなら、私の世界で料理上手と呼ばれる人の料理食べたら、こっちの人って美味さに失神するんじゃないですか」

「そんなに！？」

鍋は誰が作ってもそうそう失敗しないし。本当、この世界の料理ひどすぎ。出汁とか旨みとか隠し味とか、そういう要素がスッポリ抜け落ちてる。

私がそう説明していると、横でアーディンが深い溜息をついた。

「……だから、一度この味を知ってしまうと他のものが食えなくなると言ったんだ」

「だろうね。納得した。それにしてもこれ、何か飲みたくなる味だよねえ」

「ああ、私の世界では鍋つつきながらお酒のものが割と普通ですよ」

それを聞いたジョセフさんの目が輝く。

「そうなんだ！ アーディン、何か飲んでいいかな」

「酒蔵に行って適当に好きなの取ってこい」

アーディンはジョセフさんを見向きもせずになんと言った。視線は目の前の鍋に集中している。そんなに飢えていたのかアーディンよ。酒蔵に行ったジョセフさんは、何本かワインを見繕って戻ってきた。

「お待たせ、何でも合いそうだったから適当に持ってきてしまったよ」

「一応私未成年なんで、二人で飲んじゃってください」

私は酒を注がれないように、手元のコップを握り締めて宣言する。この連中の前で酔うとか危険すぎる、絶対素面を死守しなくては。そう言わずにーとかいって絡まれるかと思ったが、私の考えを読み取ったのか何なのか、ジョセフさんはへー残念、と軽く流すだけに留めてくれた。

「じゃ、まずはこれ開けようか」

ポン、という音がしてワインが開封された。



一時間後。

そこには、ほぼ食べつくされた鍋と、まあ普通に満腹になった私と、結構飲んでた癖に顔色一つ変わっていないジョセフさんと、あわれぐだぐだになったアーディンがいた。

ジョセフさんが強いのはまあ想定内だからいいとして、アーディン、弱っ！　こんなに酒に弱かったのか。

「みーやー」

「重っ！」

しかも絡み酒。酒臭い息を吐きつつ、背後から私の肩に顎を乗せてくる。ちょ、ストッパー役、仕事はどうした！

「はははは、それぐらい許してやってよ。本気でやばくなる前には止めるから」

「この役立たず！　アーディン重い、離れなさい！」

「なんでそんなに冷たいんだ……昔はもっと優しくかったのに……」

アーディンはじわりと瞳を潤ませた。酔いのせいで感情の振り幅が大きくなっているらしい。酒のせいでピンクに上気した肌と、涙ぐんでキラキラ輝く緑の瞳はかなりの破壊力だが、中身はただの酔っ払いだ。

「私より年上の大人相手になんで優しくしなきゃならんのよ。それに、子ども扱いしたらしたで怒る癖に」

ぐいと押しやると、そのまま壁にゴンと頭をぶつけて停止。数秒後にはグスグスと泣き出した。絡み酒で泣き上戸とかどんだけだ。

「ううっ……こんな冷たくされるんなら、子供のまま会いたかった」
「無茶言わないでよ」

「……子供の頃だったら、目一杯触り倒しても何もいわれなかったのに」

「は？」

「間違えたふりして着替え中に部屋に入っても怒られなかったし」
「おい」

「ミヤが帰った後、ミヤの部屋でお」

「はいここまでー」

非常に気になることをアーデインが吐こうとした瞬間、私の両耳はジョセフさんに塞がれた。

「や、ちょっとジョセフさん！ 今の超気になるんですけど！」

耳を塞がれたまま別室に誘導され、ようやくそこで開放された私が訴えると、ジョセフさんはにこりと微笑みを浮かべた。

「同じ男からのお願いとして、あれは聞かなかった事にしてあげて欲しいなあ。っていうか、君が聞いたことを酔いが冷めたときに知ったら、あいつ自殺しかねないから」

「……にしても」

「まあ酔っ払いの戯言だと思って忘れてあげてよ。後片付けは僕らでやっとかから、君はもう休むといい。念入りに酔わせたいし、

あいつも夜這いはかけないと思うよ」

「やっぱりわざと飲ませまくったんですか……」

ジョセフさんは見事なウインクを一つ決めると、アーデインの元へと戻っていった。

………疲れた。

◇6

「あー……朝だ……」

朝日が顔にあたり、眩しくて目が覚めた。カーテンも引かずに寝入ってしまったらしい。

辺りはしんと静まりかえっている。結局昨晚はあのまま泥のように眠ってしまったが、あの二人はどうしただろう。

「っていうか、着替えとかどうすんの……」

昨日は着替えもせずに寝てしまったため、服がグツチャグチャだ。これをそのまま今日も着用するのは抵抗がある。

まだ半分頭が寝ているのを無理やり覚醒させ、部屋を見回す。15年前私が使っていたこの部屋はそのまま綺麗に保存されており、クローゼットを開くと、私がここで着ていた服が何着か吊るされていた。多少古びてはいたが、袖を通すのに何の不都合もない。これでいいや。

部屋を出ると、綺麗に片付けられた食卓でジョセフさんがお茶を飲んでいた。私起きてきた事に気づくと、にこりと爽やかに微笑む。本当、この人も見た目だけはいいいね。

「おはよう、早いね」

「おはようございます。すみません、昨日は後片付け任せちゃって」「いいよいいよ、タダ飯食わせてもらった礼だとも思ってくれれば。よく眠れた?」

「ええまあ、おかげ様で。アーディンは?」

「撃沈中。あいつが酒弱いのがかってて飲ませた僕のせいだけど。」

あはは」

ひでえ。いや、アーディンが暴走する前に先手を打ってくれたと思えば有難いのか。

「まあそろそろ起こさないかね。仕事もあるし」

「仕事になるんですかね」

「医務室で治癒魔法かけりゃ復活するよ。行きはちょっと引きずっていかないと駄目かもしれないけど」

笑顔のまま鬼のような台詞を吐くと、ジョセフさんは飲んでいたコップを置いて立ち上がった。

「さて、ちょっと手伝ってくれる？」



昨夜グダグダだった酔っ払いは、掛け布団を抱き枕状態にして、ピクリともせず横たわっていた。

長いまつげはしっかりと閉じられ、完璧な曲線を描く眉は軽くしかめられている。顔色が青白いのは二日酔いのせいだろうに、肌が綺麗なもんだから陶器の人形みたいだ。そして、それに彩を添えるかのようにシルバードロンドの髪が、一筋はらりとかかっていた。

「何、このリアルで少女マンガみたいな男」

「少女マンガって何？」

「……夢見がちな乙女の幻想を形にした、私の世界の読み物です」

「あー成る程。でもこいつ、中身でぶち壊しじゃない？」

あんたが言うな。

「それはともかく、起こさなくていいんですか」

「うん、よろしく」

「……私に起こせと？」

じろりと視線を飛ばすと、笑顔でバリアーを張られた。手ごわい。

「だってほら、調子の悪い朝にいきなり野郎の顔拝まされるよりは、女の子にやさしく起こしてもらう方が嬉しいじゃない」

「私は優しく起こしたりしませんよ。それに不用意に近づいて寝台に引っ張り込まれるのは御免です」

「大丈夫、そのための僕だから」

私がメインであんたはオプシヨンか！

さあさあ、と背を押され、私は仕方なくアーデインに近づいた。1mほど距離をあけた所から、とりあえず声をかける。

「ちょっとアーデイン、大丈夫？ 朝だけど起きられる？」

「……う」

やや掠れた、吐息交じりの壮絶に色っぽい声がかえってきた。駄目だ、これは駄目だ。全身に鳥肌が！

私はさっさと白旗を揚げた。

「じ、ジョセフさん無理です、こんな危険物に近寄りたくない！」

「君も結構ひどいよねえ、色々と」

「だってこれ、もはやフェロモン垂れ流し兵器じゃないですか！ 騙される女の子を出さないためにも適切な処置をお願いしたく」

「……………泣いていいかな、俺」

「やあ、おはようアーデイン」

危険物、もといアーディンは眉間を指でほぐしつつ、ズルリとその身を起こした。本調子でないのはあきらかで、上半身がややフラついている。

「なんでこんなに頭が痛いんだ……昨日の記憶も途中から曖昧だし」「ちよつと飲みすぎちゃっただけだよ。お前が記憶飛ばすほど飲むのも珍しいけど、まあ料理も美味しかったもんね」

しれつと返答するジョセフさん。

あんたが飲ませたんじゃないか！ と突っ込みたかったが、それを言ってしまうと藪から蛇をつつきだしかねないので、私はひたすら沈黙を守っていた。

「というわけで。体調が優れない所、まことに申し訳ございませんが、本日は研究報告会議の予定ですので出勤の準備をお願いします」

ジョセフさんは、微笑みはそのまま友人モードから秘書モードに切り替えた。やはりこの人は鬼だ。



結局、出勤する二人に着いて、私は今日もまた魔道研究所に来てしまっていた。アーディンの家で待つのも変だし、かといって他にいく先もなかったのだから仕方がない。

顔面蒼白でフラフラしていたアーディンは、ジョセフさんに引きずられて医務室へと消えていった。一人残された私は、とりあえず休憩室へと向かう。またかと言われそうだが、職員じゃないので行ける場所も限られているのだ。

今後の自分の身の振り方を、真剣に考えなくては。出来ることならとっと自分の世界に帰りたいが、自力では無理。アーデインは帰さないと明言しているので頼れないし、ハロルドさんは田舎に引っ込んでしまっている。しばらくこっちの世界で凌ぐしかない。つまり、何とか一人で生活する手段を見つけなくてはならないわけで。

「どっか住み込みのバイトとか募集してな……うぶ」

突如私の視界が、飛来する何かによりベシヨつと塞がれた。なにこれ。

「あ！ それ逃がさないように捕まえて！」

カツカツと軽い足音と共に声がした。私は反射的に、顔にはりついたそれを両手で掴んで引き剥がす。

手の中のそれはキイキイと高い声をあげてもがいている。コウモリのような羽根のついた生き物だ。いわゆるインプと呼ばれるそれは、全身赤褐色で年老いた老人のような顔をしていて、正直可愛くもなんともない。おそらく研究所のどこかで、召喚実験として呼び出されたのだろう。

「ありがとう、助かったわ。ちょっと目を放した隙に、実験体が逃げ出しちゃって」

先程の声の主がやってきた。おお、何と言うゴージャス美女。別に格好が派手なわけではないのだが、目鼻立ちがはつきりくつきりしているので雰囲気は派手だ。地味な私と、女という同じカテゴリーでくくるのも気がとがめる。こんな美女もここにお勤めなのか。

「いえいえ。はいどうぞ」

「……あら、あなた」

美女は受け取ったインプを、その手に持っていたカゴに乱暴につこむと、改めて気がついたように私の顔を凝視した。

「あなた、所長が昨日呼び出した子じゃない？」

「……はあ、まあそのようなものです」

ああ、バレている。まあ昨日あれだけ騒いだんだから、面が割れても仕方ないか。

私が頷くと、美女は嬉しそうにその手を私の腕に絡めてきた。なんだなんだ。

「やだ、かーわいい！　ね、あたくしの研究室へ来ない？　おいしいお菓子があるから、是非一緒にお茶しましょう」

「は？　いや、私は」

「それに異世界のお話も聞きたいわあ。昨日はあなたたちが帰った後、研究所内大騒ぎだったのよ。推測や憶測が乱れ飛んで」

なんだと。ややこしい話になっていないだろうな。せっかくだから、現状把握しておいた方がいいかもしれない。ついでに、いいバイト先の情報なんかも仕入れられれば御の字だ。

「それじゃあ、ちょっとだけ」

「いらっしやいいらっしやい！　さ、こっちよ！」

美女は私の手を引くと、うきうきとした様子で研究室へと私を誘った。

美女に案内されて足を踏み入れた研究室は、女性らしい、どこか優しい雰囲気にする明るい部屋だった。さりげなくそこかしこに、可愛らしい小物なんかが置かれているせいだろう。この部屋を見ると、ハロルドさんやアーデインの研究室は、散らかり放題ということとはなくともどこか殺風景ではあったなと思う。

「さ、座って頂戴。今お茶をいれるわね」
「失礼します」

指し示された椅子に腰掛け、手際よくお茶が入れられる様子を眺める。

「名乗りもしないでごめんなさい。あたくしはイリア・コーウェル」
「どうもご丁寧に。片桐美弥と申します。ミヤが名前です」
「ミヤちゃん。可愛い名前だわ」

美女改めイリアさんは、私にお茶を差し出しながら微笑んだ。悪意は感じられないが、いまひとつこの人の真意も掴めない。

「急に引っ張られてきちゃってびっくりしたかしら？」
「ええ、まあ……」

「ふふふ。だって気になるじゃない、あの冷血男が脇目もふらずに追いかける女の子。こんな面白そうなネタ、見逃す手はないと思って。昨日はがっちりガードされて近づけなかったけど、さっきは一人だったから思わず連れてきちゃった」
「はあ？」

冷血男って誰のことだ。話の流れ的に考えると奴のことだとは思
うけど、でも冷血って。

「あら、分からない？ ……ああそうよね、あなたの前では人間変
わっちゃってるものねえ」

「もしや」

「うふ。察しが着いた？ うちの冷血所長」

やっぱりか。昔、他人には優しく接しなさいとあれだけ教え込ん
だというのに、人見知りがなおらないのも困ったものだ。というか
そんなんで研究所をまとめる事ができるのか。大人になったのなら、
上辺だけでも人当たりのいいふりをしろと。

私が脳内でアーデインの頭をベシベシと叩いていると、イリアさ
んは両手を小さく左右に振った。大人っぽい美貌をもつ女性なのに、
なんだか可愛らしい仕草をする人だ。

「あ、一応仕事上の人付き合いは流石にきちんとしてるわよ。でな
いと所内で暴動起きちゃうわ。所長が冷たいのは、主に女の子に対
して」

「あー」

そういえばジョセフさんもそんな事を言ってたな。

イリアさんは私に顔を近づけると、内緒話でもするかのように声
を潜めた。

「あたくしがここに就職した年に、あの人が所長就任したんだけど。
何しろあの外見でしょう。新人の子はみんな、そりゃあ浮き足立っ
ちゃってねえ」

「ははあ、みんなコロっと騙されたと。聞くところによると、近づ
く女の子をちぎっては投げちぎっては投げしていたとか？」

「その例えに合わせるなら、手も使わずに投げてた感じだわね。声をかけようと近寄って見たら、空気がすでに接近を拒絶してるんだもの。度胸のない娘はそこで脱落」

「社交性のかけらもない！」

「自分に自信のあるタイプの娘なんかは、それでも喰らいつつあったみたいけど」

こっちの世界にもいるんだな、肉食女子。恋愛に前向き、当たって砕ける。自分にその矛先が向けられない限りは嫌いじゃないぞ。

「所長は相手にしてなかったんだけれど、自宅にストーキングする娘が出ちゃってね」

「そりゃ色々とまづいんじゃ」

「そうなのよね。それで所長、ついに切れちゃって。移送法陣でその女の子国外に飛ばしちゃったの」

えええ、いいのかそれ。アーディン結構無茶苦茶するなあ。

その話を聞いて私が啞然としていると、イリアさんは楽しそうに声をあげて笑った。飛ばされた女の子はその後、秘書のジョセフさんが回収したらしい。胃に穴が開くって言ってたのはこの辺のことか。そりゃあお疲れ様だ。

「そのあと所内の人間全員集めて、今後、俺をそういう対象として見る奴は、誰であろうと文字通り”飛ばす”から覚悟しておけ、って宣言してたわ」

「……そんな所長嫌すぎますね」

「まあ、当人にちよっかいをかけなければ何もないから。それで、徐々に所長の内面的なとっつき難さなんかも所内に知れ渡って、アタック騒ぎも収束した感じ」

「イリアさんはアーディンのあの見た目に騙されなかったんですね」

「あたくし？」

さっきから冷静な視点だった、というか妙に面白がってる節があったし。自分が熱を上げて追っかけた経験があったのなら、今の話に多少なりとも感情的なものが入ったと思うけど、それもなかったし。

私がそう聞くと、イリアさんはちょっと驚いたようにぱちぱち、と瞬きを二つした後、にっこりと大輪の花のような微笑を浮かべた。ん、誰かをほうふつとさせるなこの笑顔。

「あたくしはねー、元々知っていたから」

「元々？」

「あたくしの……」

「イリア、お前ミヤさんを拉致したんだって？」

と。イリアさんが話を続けようとしたのを遮るように、人が室内に入ってきた。この声は。

「あら兄さん」

「早く返してくれないかな、所長が拗ねるから」

「やあだ、困った所長ねえ。余裕のない男は嫌われるわよ。それに拉致なんて人聞き悪いこと言わないで、ちょっとお話していただけないに」

「何でもいいよ。ミヤさん、悪いんだけど所長のところに顔出してやってくれるかな。今のままじゃ仕事にならなくて。ちょっと活入れてくれれば、それでいいから」

「ジョセフさん!!」

「ん？」

兄さんってあんた。どこかで見た笑顔だなあと思ったら案の定

だよ。

私が二人の顔を交互に見ていると、イリアさんが悪戯っぽい笑みをその華麗な美貌に浮かべ、ぱちりとウインクした。

「知っているだろうけれど、改めて紹介するわ。これ、あたくしの兄のジョセフ・コーウェル。昨晩は愚兄が色々とお世話になったみたいで、御免なさいね。せっかく二人きりのはずだったのに押しかけるなんて、無粋極まりないわよねえ」

「いやいやいや、それはむしろ有難かったので」
「あらそうなの？」

「ミヤさんは超がつくほどシャイだから、いきなり二人きりはハードルが高すぎるんだよ」

「ええまあ……じゃない、違う！ そんな事よりジョセフさん、本当に妹さんがいたんですね。てっきり冗談かと思ってました」

「あ、疑ってた？ 僕は嘘は言わないのに、心外だなあ」

あんたは本当のことをあえて言わないで、場を混乱させて楽しむんでしょうが。そもそも同じ職場に勤めてるって聞いてないし。

改めてこうやって見比べて見ると、この兄妹は結構似ている。髪の色こそ茶髪と金髪だが、どちらも青い良く似た目をしていた。だがそれより何より、纏う空気がそっくりだった。爽やかな笑顔と華やかな笑顔が、それぞれこちらに向けられる。

「普段の自分の行動が行動だから信用されないのよ。ねえ？」

「何を言うかな、僕は誠実な男だよ。ひどいなあ。ねえ？」

「あはははは……」

ものすごく居辛いわ！ この兄妹に挟まれて、にこやかに会話とができるか！ 情報を引き出して現状把握とかする前に、こっちがハゲそうだ。

私はアーディンに呼ばれているのをいい事に、この場を退散することにした。長居すればするほど神経が磨り減るのは明らかなんだから、さっさとずらかるに限る。

「またいつでも遊びに来てね。女同士の秘密の話とか大歓迎だから」「え、ええ……その折にはお手柔らかにお願いします……」

名残惜しそうに手を振るイリアさんにお茶のお礼を述べ、私はジョセフさんに着いてアーディンの部屋へと向かった。

あ、いいバイト先ないか聞くの忘れた。……また後で考えよう。



「ミャ！」

扉を開けるとほぼ同時に、デスクに向かっていたアーディンがパッと顔を上げた。

私が部屋の中に入ると、後はよろしくと背後からジョセフさんの声がして、扉が閉められた。やれやれ、この困った男のご機嫌を浮上させろって話だったのか。

「二日酔いは治ったわけ？」

「あ、ああ。それはもう良くなった。それより、どこに行ってたんだ……黙っていなくなるから、てっきりここから出ていったのかと」「ええ？」

言われて見ればそうか、律儀にここにいる必要はないんだな。街に出てバイト探せばよかった。とはいえ、これを口に出すと多分面倒な事になるので、心の中で呟くだけに留めおく。

「ちょっとイリアさんの部屋にお邪魔してただけだよ。出ていっても、行く当てがないじゃない。何の心配してるの」

「……また、置いていかれるのは嫌なんだ」

アーディンの緑の双眸の奥に、置き去りにされた子供の抱く不安感が揺らめいているのが見えた。

「アーディン」

「頼むから、側に、いてくれ」

消えそうな声でそう言うと、そっと私に擦り寄ってくる。

私は無意識に、子供の頃そうしたようにアーディンを抱き寄せ、頭を撫でた。

数分後、私が我に返ったのは、背に回されたアーディンの手のひらが不穏な動きを見せたからだ。

「……ちよつと。何してんのこら!!」

「あ、バレた」

「人がちよつと優しくしてやったらあんたは!! どこ触ってんだ、はなれろおお!!」

「ミヤ悪かった!! でもほら、こう腕の中にあると、触っちゃうのは本能なんだ……って痛ッ、痛いって! 本の角はやめろ角は!!」

「そんな本能、ゴミ箱に捨ててしまえええ!!!!」

全くこの男だけは、本当どうしようもない。

「アルバイト？」

「ええ。求人してそうな所、心当たりがあれば教えていただきたいんです。求人のでら貼ってあったよー、とかでもいいので」

私がそう言うと、書類の束を抱えた職員のお姉さんは首を傾げた。

「そうねえ……飲食店なんかは、結構いつでも従業員の募集をする気がしますけど」

「ふむふむ」

「ただ、身元保証人がいないと駄目な場合が多いですよ。飛び込みOKな所は色々怪しい仕事をさせられる可能性も」

「ううむ、そうですか……やっぱりこっちの世界もその辺は厳しいか」

アーディンに鉄槌を食らわせてジョセフさんに引き渡した後、私は自分の今後のための行動を開始していた。ぶっちゃけると働き口を探していた。街で闇雲に捜し歩いても効率が悪そうだったので、とりあえず手近の研究所の人に話を聞いて、ある程度当たりをつけてから動こうという腹積もりだ。

このお姉さんに聞いたのは特に理由はない。バイト探さないとない、と思っていた時に丁度通りがかったから、勢いで話しかけただけだ。

「でも、どうして仕事なんて？」

「生きていく上で必要に迫られまして」

「あら……所長がそうしろって仰ったの？」

訝しげなお姉さんの視線を受けつつ、研究所内で私がどういう位置づけになっているのか疑問に思う。私は一体アーディンの何だと思われているんだ。

「ええとですね、自分の生活費ぐらい自分で稼ぎたくて。私、今一文無しなんです。早急に仕事につかないと、このままじゃプー太郎ですよ、ニートですよ」

「まあ……あ」

「理想を言えば住み込みがいいんですよ。さっさと出て行かないと、何されるか分かったもんじゃないし。奴は美形の皮をかぶった只の野獣ですから」

「あの、それは……」

お姉さんがちょっと固まった。が、気にせずここは畳み掛ける。切々と訴えてれば何か教えてもらえるかもしれない、プッシュアップシュダ。

「まず今晚泊まる場所をどうしようか悩んでるんです。良さそうな所があればと思って、とりあえず声をかけさせて頂いたんですが」

「成る程ねえ」

「他にどなたか知ってそうな方がおられるなら、それでも構いませるので教えて頂ければ」

「知ってるよ、いい働き口」

「マジですか！　ってなんで背後から……ぎゃあー！」

いやもう何度目だ、このパターン。お姉さんが固まっていたのは、私の訴えに啞然としていたんじゃない、背後のこの男のせいだったか！　不覚！

「そんな毎度びっくりしなくても」

「しますよ！ ジョセフさん神出鬼没すぎるでしょう、どこから沸いて出たんです。仕事はいいんですか仕事は」

ジョセフさんは相変わらず、心のうちが読めない笑顔で私に笑いかけた。あ、油断してる間にお姉さんがこっそり立ち去ってしまったじゃないか、どうしてくれる。

「用事をすませて戻ってきたんだよ。そうしたら君を見かけたから。声かけようと思って近寄ったら興味深い話をしてたもんで、つい聞いちゃった」

「……まあいいですけど、本当の事ですし。で、働き口あるって本当ですか」

「うん、お望みどおり住み込みの所。3食まかない付き。好条件でしょ？」

「おお、紹介してください！ どこですか！」

「僕ん家」

……これももう何度目か、時が止まる。この人は、どこまで人からかえば気が済むというんだ。そんなに私の反応は面白いかこんなくしょう。

私は、こめかみの血管がビキビキするのを感じつつ、それでも年上相手なのでキレそうになるのをぐっと押さえ、なんとか冷静な声をひねり出した。

「今の冗談は面白くないです。で、どこなんですか」

「だって冗談じゃないもの、ここで爆笑されたら傷つくなあ。まあ僕の家というか、僕の実家なんだけどね」

「ジョセフさんのご実家……？」

「両親は小さめの飲食店をやってるんだ。僕は実家を出て一人暮らししてるから、その辺の心配はいらないよ。イリアはまだ実家から

通勤してるけど」

「な、成る程……びっくりした。早合点でした、すみません」

そういうことか。今回ばかりは疑って悪かったといわざるを得ない。というか、昨日のも普通に実家を推薦してくれてたのかもしれない。その後の行動は別として。

私が謝辞を述べると、ジョセフさんはにこにこ流してくれた。内心どう思っているかは知れないが。

「いいよ、気にしてないから。それでね、食事時は両親二人だけじゃ忙しくて、手伝ってくれる人を雇おうかってこの間話してたんで、なら丁度いいんじゃないかと思って」

「つまりホール係ですね……それならなんとかなるかな」

いくら働く意欲があっても、いきなり専門知識や特殊技能を求められる職はさすがに無理だ。給仕ならなんとか立ち回れるだろう。よし、光が見えてきた。

「とにかく働けるならこっちは願ったり叶ったりですよ。ジョセフさんからご紹介していただけるってことですよね？」

「それは勿論。あ、でもそうだな……」

一度は頷いたジョセフさんだったが、口元に手を軽くあてて何か考え込んだ。そしてポンとひとつ手を打つ。

「案内はイリアにさせるよ。僕はちょっと手を回してこないといけないところがあるから」

「手を回す？」

何のことだと聞き返すと、ニヤリと黒い笑みを返された。おーい、

地が出てる地が。

「猛烈にごねそうなのが一人いるじゃない。あれを何とか納得させないと、君が働く以前の問題でしょ」

「あああー」

そうだった。自分のことに必死で、ついつい脳内から追いやっていた。

なりは大きくなっても精神が子供の頃とあまり変わってないから、私が黙って出て行ったら、奴は絶対大暴れする。ここは舵取り係のジョセフさんにうまく操縦してもらおう。

「お手数おかけしますがお任せします、よろしくお願いします。昔から、私がちよつと出かけると迷子の子供みたいに騒ぐんです。アーディンって子供の頃お母さんいなかったから、どこかで私に母性を求めてるんですかね。本人は否定してましたけど」

私がそう言うと、ジョセフさんは片方の眉をちよつと上げた。地味なところで器用だな。

「ふうん、……それはどうだろうねえ？　まあ君がそう思ってるんなら、それはそれでいいじゃない」

何かひっかかる言い回しをされた。が、聞き返さないことにする。本当は、子供が親に向ける思慕以外の感情も多分に含まれているだろう、なんて事は分かっているんだ。でも、それを直視してしまうと逃げ道がなくなるのも分かっているから、見ない聞かないしやべらない、だ。あーあー聞こえない聞こえない。

「ともかく話はイリアに通しておくから、定時前にイリアの所に行

くといいよ。こっちは任せておいて」

「頼もしい限りです」

「あはは。じゃあ、また後でね」

ジョセフさんはひらひらと片手を振ると立ち去る。私は頭を下げ、ジョセフさんを見送った。

さて、うまくいきますかどうか。



アーディンと鉢合わせしないよう適当に時間を潰し、定時間際になると私はイリアさんの研究室に足を運んだ。

扉をノックするとすぐに開けられ、笑顔満面の美貌が部屋の中から現れる。

「今朝方はどうも、あの」

「いらっしやい！ 話は兄から聞いてるわ、早めに出ましよう！」

イリアさんは全て承知、とばかりにうきうきとした足取りで部屋に戻り、カバンを引っつかむと戻ってきて扉にカギをかけた。定時前だけどいいんだろうか。私のせいで始末書とか書かされたりしなきゃいいんだけど。

顔にその辺のことが出ていたのだろう、イリアさんは私を見てにっこりと微笑むと言った。

「心配いらないわ。兄は腹黒い分、その辺姑息で用意周到だから。うまく調整してくれるわよ」

血縁だからこそ、何の遠慮もない表現がえげつない。だがそれが信憑性を増しているのも事実だ、なんとおそろしい。

「なんというか、私の我侭で色々ご迷惑を」

「やあだ気にしないでいいのよ！ それより、お店についたら何か作って欲しいの。あなたのお料理、すごく美味しいんですって？」

兄だけ食べてるなんて許せない！ あたくしも食べたい！」

「え、でも飲食店で素人が料理するっていいんですかそれ」

「構わないわよ、あたくしが食べるんですもの。それに新しい味を知ることができれば、両親も喜ぶわ。採用試験代わりだとも思っ
て、存分に腕を振るって頂戴！」

「はあ、そんなものですか」

思わぬ展開になってきた。ジョセフさん、人の料理についてどんな批評をしたんだ。そんなに期待されるほどのものは作れないのだが、さてどうしたものか。

……まあいつもの通り、適当料理を出すしかないのだが。お客に出すわけじゃないならいいや。

私は数秒で悩むのを放棄した。死ぬほど不味くなければこっちは人は喜んで食べるし、なんとかなるだろう。それに私の職種はホール係だ、料理はおまけだ。

「あ、それでお部屋なんだけど。今日だけあたくしと同室で我慢してくれるかしら、明日には他のお部屋使えるようにしておくから」
「ああ、全然問題ないです、むしろ急に押しかけて申し訳ありませんとしか」

「うふ、兄は昨日のうちから部屋を片付けておけって言ってたけれど」

「は？」

「さ、行きましよう行きましよう！ ああーおいしいごはん、とっても楽しみ！」

イリアさんの勢いに押され、再度聞き返すことができなかったのは、そのまま流されるようにコーウェル家経営の飲食店へと向かったのだった。

◇9

「大将、日替わり3人前ー!」

「あいよォ!!」

「オバちゃん、酒おかわりーっ」

「はいはい!!」

こじんまりとした店内は夕食時ということもあってか、お客でいっぱいだった。客層はこのあたりで働いている職人のおっちゃん連中がメインといった感じだ。きっと常連なのだろう、気さくに客同士でやりとりしつつ食事を楽しんでいる。

店に足を踏み入れた私は、忙しそうにくるくると働く熟年夫婦を見つけた。が、さすがにこの状況で声をかけるのは営業妨害だ。

「時間ずらした方がよかったんじゃないでしょうか。えらく立て込んでいるようですけど」

「うふ。だからこそ連れてきたんじゃないの! はい、これ」
「は?」

イリアさんに押し付けられたものを広げて確認。OK、エプロン。

「……なるほど、実地試験ですか」

「そんな大層なもんじゃないわよ。この時間だけ、ちょこっと手伝ってくれると助かったちゃうの。父さーん、母さーん! かわいい助っ人連れてきたわよう!」

「ちょ、声でかっ」

イリアさんは店内に響き渡るかというような大声で、店の奥にいるご夫婦を呼んだ。当然、店中のお客もこっちに大注目だ。うわあ

ああ、こっちみるな。

「おー、イリアちゃんお帰り！ 看板娘いないと寂しかったぞー！
」

「おお、どこの子連れてきたんだ！」

わっと盛り上がるおっちゃんたち。そうか、イリアさんはおっちゃんたちのアイドルか。きっと小さな頃から、その美貌で近所のおっちゃんたちをメロメロにしていたのだろう。

イリアさんは愛想よくお客のちよっかいをかわし、私の背をグイグイと押して店の奥へと入っていった。

「たーだいまつ」

「お、イリアどうした。今日は早いじゃねえか」

「あら、助っ人ってそのお嬢さん？」

「ど、どうも」

あれよあれよという間にイリアさんのご両親の前まで押し出されてしまい、私は思い切り挙動不審な挨拶をしてしまった。

どこか品のいい婦人は、イリアさんのお母上だろう。さすが美形兄妹の生みの親。今でもお美しいご婦人だが、若い頃はさぞやモテモテだったに違いない。

そしてその隣でフライパンを握るのはお父上か。結構ガツシリと
していて、汗止めがわりに布巾を頭に巻いて働くその姿は、料理屋の亭主というよりは漁師っぽい。演歌似合いそう。兄弟で船こぎそう。

「ええっと……」

「おお、助っ人たあ有難え！ 今の時間は猫の手も借りてえんでね
！」

「可愛らしいお嬢さんね、イリアグッジョブ！ さあさあ早速これ運んでちょうだい！」

軽快なノリだなご両親。

私は発言する隙も与えられず、いきなり料理の載った小皿をお母上から手渡された。

「ええ！？ 私が何者かとか聞かないんですかっ」

「あとでゆっくり聞くから！ そのお料理、あそこのテーブルまでよろしくね！」

「うおっと」

「こぼしちゃだめよ」

お母上はにこにこ笑いながら、ポンと私の肩を叩いた。ああ、この”人の話聞かない”感じ。間違いなくこの人はジョセフさんの親だ。そしてイリアさんはどうしたのかと見回すと、いつの間にか身支度を済ませてお客の注文を受けていた。マジでいつの間に。

なんだかんだで勢いに流されてしまった私は、その後2時間ほど店内を走り回らされたのだった。



「いやあ助かった。今日は特に客が多かったから、正直てんてこ舞いだったんだ。あと一刻もすりゃ店じまいだ。もう落ち着いたから休憩してくれていいぞ、お嬢さん」

「しょっぱなから中々ハードでした……」

客足も大分落ち着き、店内にいるのも居残り常連ぐらいになった頃、私はようやく空いた椅子に腰をおろすことが出来た。と同時に

腹がグウと鳴った。そういえばまだ夕食もとっていなかったんだ。忙しすぎて腹の音にも気づかなかったとかどんだけだ。

空腹を意識すると、途端に力が抜けてくる。私がぐったりしていると、イリアさんがにこやかに近寄ってきた。

「うふふ、なかなか頼もしい助っ人っぷりだったわよ」

「今日はイリアさんにしてやられました」

「あら〜何のことかしら〜」

私がボソリと返すと、イリアさんは満面の笑顔で受け流した。この人も兄貴に負けず劣らず、大概いい性格をしていると思うのだが。

「それより、そろそろ軽く自己紹介をさせていただきたいのですが、構わないでしょうか」

「あ、そうだったわね!」

私がそう言っていると、ようやく思い出したのかイリアさんが両手をうち合わせる。

「父さん母さん、今日手伝ってくれたこの方、ミヤさん。研究所で知り合ったの」

「改めましてはじめまして、片桐美弥です」

「あら、イリアの職場の方なの?」

「研究所に勤めてるわけじゃないんですが……えーと」

どう言えればいいんだろう。そもそも人間召喚ってこっちの世界的にアウトだったような気がするのだが、言っちゃったらまずいのはなからうか。

私が逡巡していると、イリアさんは満面の笑顔を浮かべ、ぐいと私を引き寄せた。

「細かいことはいいじゃない。それよりこの子、超おいしいお料理作るの！ もうスカウトするしかないと思って！」

「そこ推すところじゃないでしょう！」

有耶無耶にしてくれるのはありがたいが、そっちをプッシュするのか！ 私の料理食べたことないのに何でそんなに自信満々なんだ！ しかもイリアさんの発言を受け、お父上が眼光鋭く身を乗り出した。うわあ食いつかれた。

「おお？ そいつあ聞き捨てならねえな！ 是非ともその料理、味わいたいねえ」

「い、いやいやいやプロにお出しするとか、そんな事とても」

「あら謙遜しちゃって可愛らしい。いいのよ、他の人のお料理つてとっても刺激になるんだから。ね、こっち使っていいから、何か作ってみて！」

お母上は厨房の片隅から手招きしている。ものすごく逃げづらい空気が漂う中、私はそれでも最後の抵抗を試みた。

「えええいやでも、ほらまだお客さんがお店に」

「俺らのことなら気にしないでいいよお嬢ちゃん！」

「そうそう、思う存分腕ふるっていいよ！」

「あいつら馴染みだ、遠慮はいらねえ。それよりほら、お手並み見せてくんない！」

だめだ、退路は断たれた。

私は仕方なく、お母上の元へと向かう。確かにイリアさんからは料理を作って欲しいとは言われていたが、こんな公開プレイ状態で作る羽目になろうとは。

「ここにあるものなら、何でも使ってくれていいわよ」
「ど、どうもありがとうございます……」

もうこうなったら、自分の空腹を満たせそうなものを作ろう。周囲の目など知らん！

さすがに料理を出す店だけはあって、設備は充実している。閉店間近なので食材は余り物になるが、それでも見た限り何とかかなりそうだ。

私は食料庫から肉とチーズを取り出した。



「……なにこれ！」

「何と聞かれると、単なる酒のつまみという感じですが」

「おお、うめえ!!」

何を作ったかというと、チーズを薄切り肉でくるんで塩コショウとバターと、あとちよつとニンニク入れて焼いただけだ。一人暮らしの適当料理以外のなにものでもない。自分でも食べてみたが、ちよつと火がきつかったせいかな焦げ気味だ。

だが、そんな大雑把メニューもコーウェル一家には大受けした。お客ほったらかしでモリモリむさぼっている。私の分は残しておいて欲しい。

「大将、なにそのうまそうな匂い。俺らにも食わせてくれよー」
「お前らにはやらん！ 飲み終わったんなら家に帰れ！」

居残って飲んでいたお客が寄ってきて、お父上が威勢よく追い払う。いいのかお客なのに。

「本当おいしいわ、兄さんが推薦するだけのことはあるわー。外はカリッとしてて、中はトロっとしてて！」

「すごく風味もいいわねえ、口の中でふわっと広がる感じで」

「お口に合ったようですねによりです」

「これなら厨房任せちまっても大丈夫だな、はっはっは！」

「いやそれは勘弁してください」

料理漫画のような感想を述べつつ食べる面々。念のため多めに作ったのだが、みるみるうちに皿が空になっていく。だから私の分は残しておいて欲しいと。

なんだかんだで適当料理がほぼ食べつくされた頃、店の扉が開く音がした。閉店間際なのにチャレンジャーなお客だな。

「あ、残念。もう終わっちゃった。手料理食べ損ねちゃった」

この声は。

入り口に視線をやると、お馴染みの爽やか笑顔を浮かべたジョセフさん。そして。

「……………」

絶世の美貌を台無しにするように、眉間に思い切り川の字を刻んでこちらを睨むアーディンが立っていた。うわあああ！

◇10

どういうことだ、なんでアーディンがここに。納得させるとジョセフさんは言っていたが、アーディンのあの顔はどう見ても納得してない感バリバリじゃないか。

そんな私の言葉にならない言葉を読み取ったのか、ジョセフさんが寄ってきて小声で言った。

「とりあえず理性では納得したって所まで持っていったよ」

「理性ではって何ですか、理性ではって」

「感情が納得しないんだって。困った奴だよねえ、あはははは」

「あはははは、じゃないわー！」

それはつまり、頭では分かってるけどやっぱり納得できねーんだよコノヤロウ、という事と同義じゃないか。この役立たず！

「まあ、第三者の僕がこれ以上言っても効き目がないというか、こじれそうだったから。最後の引導を渡すのは本人が一番かなと思って、連れてきちゃった」

「引導渡していいんですか」

「後が面倒だから、立ち直れる程度にしてやってくれとありがたいんだけど」

そんな不穏な会話をボソボソヒソヒソとやっている、戸口に立っていたアーディンがすごい勢いで近寄ってきた。どけと言わんばかりにジョセフさんを押しやり、私の目の前に立つ。なんか目がつきあがってて凄い恐いんですが。

「ミヤ。俺に言うことは？」

「あー……」

怒ってるなあ、うん。とりあえず、まずやるべき事は。

「色々あるけど、場所替えよう。お店の迷惑になるし」

ひとまず外へ、だ。



私がアーディンを引っ張っていった場所は、店を出て少し離れた路地だった。あまり遠くに行く必要はないだろうし、こっちの会話が店内に聞こえなければそれでいい。

そして話を再開。

「ここでいっか。ええと、言うこと言うこと……生活費ぐらい自分で稼ぎたい？」

私が首をひねりつつそう言うと、アーディンはギッと眉毛までつり上げた。ぎゃあ、だから整った顔の人間が怒ると物凄く恐いんだって！

「他に言う事あるだろう！　なんでジョセフに相談して、俺には黙ってたんだ！」

あ、まずそこに怒るんだ。あー……なるほど、デリカシーのない娘でごめん。でもなあ。

「ジョセフさんに相談したというより、聞かれてたって感じなんだけどね……そもそもアーディン、私が出て行くっていったら絶対騒

ぐでしょ？」

「そりゃ……」

「このお店を紹介してもらったのも、得体のしれない場所で働くよりは安心だと思ったからなんだけど。イリアさんも住んでるし」

「安心……なものか！」

アーディンは顔の横でぐっと拳を握り、力強く断言した。

「酔客だらけなんだぞ！ そんな中をミヤミタいな娘がウロウロしてみろ、尻の一つや二つや三つや四つ、触られて当然だ！ 俺なら触……」

「この馬鹿ー！！！！」

咄嗟にアーディンの脛を蹴った私を責める者は誰もいないだろう。おっちゃんたちよりお前の方がよっぽど危険だ馬鹿者！！

「だから家を出るつつってんのよ！ このケダモノ！！」
「っ……」

アーディンは言葉をつまらせて向こう脛を押さえ、しゃがみこんだ。あー悶絶してる。ちよっと蹴りすぎたか。

「あー……ちよっと、大丈夫？ ってうおっ！？」

「捕まえた」

声をかけつつ近寄ると、物凄い速さで手を掴まれた。しまった罠か！！

アーディンはそのまま私を引き寄せつつ、何事もなかったかのように立ち上がる。必然的に距離が近くなるわけで、私は見上げる姿勢をとらざるを得ない。アーディンの顔は20cmほど頭上にある。

すくすく育ちおって、首が痛いわ。

今まで数々のやりとりで学習したのか、逃げられないように片手で私の腕をしっかりと掴み、もう片手は私の肩をがっちりと捕捉しつつ、アーディンは真剣な顔で私を見つめた。

「前から、ちゃんと聞こうと思っていたんだが」

「……なにを」

「ミヤは、俺のことが嫌いか」

わあ、返事にくい。なんでこの男は、天下の往来で平気でこういうことを言い出すのか。もう全力で逃げ出したい。っていうかこの空気！ 腹の中がムズムズする！ 例えるなら、家族団らんでテレビドラマを見ていたら、いきなり濡れ場シーンになって物凄く気まずい思いをするあれ！ 誰かチャンネル替えてー！

ともかくにも、答えなければアーディンは納得しまい。私は観念し、思うところを率直に述べる事にした。

「嫌いじゃあ、ない」

「！」

「弟みたいで」

「お……」

アーディンはピシリと停止し、数秒後ふいに再起動した。

「あんまりだ！ 俺の方が年上なのに！！」

「そういわれても。私的にはアーディンって昨日まで子供だったわけだし、何かと手がかかるしさー。なんかこう、思春期迎えた弟を持った姉の気分なんだよね。子供からちょっとランクアップしてるよ」

「思春期なんかもうとつくに終わってる!!」

ああもう、とアーディンは私を掴んでいた手を離し、己の頭を掻きまわった。おおい、髪質柔らかいんだから無茶したらハゲるぞ。

「もう悩むのも馬鹿らしくなってきた! 一体どうすれば、ミヤは俺を年相応の男として見てくれるんだ!」

「ううーん。難しいことを聞くなあ……とりあえず、言動をもうちよいい大人に……頼れる感じに?」

今のままじゃ、ただの駄々っ子だもんなあ。私を信頼してくれて、全部あけっぴろげにしてるからなんだろうけど。

「ど……努力する」

「あと仕事に打ち込む人は結構好きだけど。これぞ大人って感じで人間として、男女問わず。この道一筋、みたいな人は純粹にかっこいい。炭焼き一筋60年とかのお爺ちゃん超渋かっこいい。あれ、でもこれ質問に対する答えと微妙に違う気がするな。」

「他はなんだろう、年上ならむやみやたらと束縛しない余裕的なものとか。適当に泳がせてくれるおおらかさとか」

我ながら調子のいいことを言っている気がしてきた。
アーディンは、答える私を食い入るように見つめた後、ゆっくりと息を吐いた。

「わかった」

「ん?」

「つまり俺は、精神的にガキっぽいとミヤには思われてるんだろう。」

よくわかった……ちよつと頭冷やす」

「あれ」

更に怒るかと思ったアーディンは、何故か意気消沈していた。ま
ずい事言っちゃっただろうか。

「アーディン？」

「帰る。邪魔して、悪かった」

それだけ言うと、アーディンはくると踵をかえし、その場を立
ち去ってしまった。

ああ、何か面倒な事になりそうな気がする。



一人で店に戻った私は、案の定コーウェル一家に取り囲まれた。
何故かホウキを握り締めたイリアさんが真剣な表情で話しかけて
くる。

「ミヤちゃん、所長に何もされなかったかしら？ 悲鳴とか聞こえ
たら助けに行くつもりでスタンバってたんだけど」

「ご、ご心配をおかけしました。対話はつつがなく終了しましたの
で」

まさかそのホウキは殴打用か。意外とアクティブだなイリアさん。
鼻息荒いイリアさんをなだめていると、その背後で腕組みしなが
ら微笑んでいたジョセフさんが問いかけてきた。

「それで、あいつ納得した？」

「えーと、納得したというか。何故かすごい凹んで帰っていきまし

たが」

「……ミヤさん、一体何言ったの？」

私はアーデインとの対話をかいつまんで説明した。もちろん個人的に恥ずかしい部分はごっそり省略した。それでもジョセフさんはアーデインの落ち込んだ理由を察したらしい。苦笑しながら自分の顎に片手をあてた。

「ああ……あいつ的に一番痛いところを、目一杯えぐっちゃったんだねえ。昔からあいつ、君との年齢差を物凄く気にしてたから。再召喚のときは、君より年上になったってんでえらく浮かれてたし。まあ精神的に余り成長してないのは事実だから、ミヤさんが悪いわけじゃないけどね」

ジョセフさん、相変わらず発言が黒いです。

にしてもそうか、そんなに気にしてたとは知らなかった。もうちょつと言い回しを考えればよかった。

その後、途中でうやむやになっていたバイトの話を変えてご両親にお願いして快諾を得た私は、何とか新たな生活基盤を手に入れることができたのだった。

そしてアーデインからはその後、何の連絡もないまま数週間が過ぎた。

◇11

私がコーウェル家経営の飲食店で働き出してから、半月ほどがたった。

ようやく仕事にも慣れてきて、それなりに立ち回れるようになってきた。食事はまさに戦場のような慌しさだが、それ以外の時間は割と余裕もある。そんな時に仕事のコツを教えてもらったり、逆に私の世界のダシの取り方なんかをちょこっと伝授したりして、比較的充実した日々を送っている。

この調子で何ヶ月か働けば、小金も溜まるだろう。

私はひそかに、貯金が一定額溜まった時点で、アーディンの祖父であるハロルドさんの元を尋ねようと思っていた。

以前、私を元の世界に送り帰してしてくれたハロルドさんは、隠居と称して田舎に引っ込んでしまっている。会うにはそこまで出向く足代が必要なのだ。

「その為にも、もうちょい頑張ってお金貯めないとね……」

閉店後の店内をほうきで掃除しながら、私は呟く。

アーディンのことを考えると申し訳なく思うが、やはり私のいるべき世界は向こうなのだ。一度戻ったとはいえ、10分の帰還では戻ったうちにも入らないわけで。

「……それに、あんまりこっちに長期間いるのはマズイし」

いくらこっちに長居しても、向こうの世界の時間はほとんど進まない。

だがそれは逆に言えば、向こうの時間が進まないまま、こっちにいる私だけがどんどん年を取るといことなのだ。軽く計算して、向こうで40秒がこっちの一年。数時間行方不明だったと思ったら、いきなり老婆になって戻ってきた、とかシャレにもならない。

だから、こっちに居られるのは、長くてもあと1、2年が限度だろうなと思っている。

そんな私の物思いを断ち切るかのように、カランカラン、と音をたてて店の扉が開いた。あれ、看板降ろすの忘れてたっけ？

「すみません、もう店じまいで――あ」

「や、ミヤさん。元氣そうだね」

ひょいと店内に顔をのぞかせたのは、ここ数週間ご無沙汰していたジョセフさんだった。相変わらずの笑顔だ。

「ご両親なら奥でゴミ出しと洗い物をなさってますけど。お呼びしましょうか？」

ほうきを持ったまま奥へ行きかけると、ジョセフさんは片手を挙げて私を止めた。

「ああ、いや。今日は親の顔を見に来たわけじゃなくて、ミヤさんに頼みごとがあつて」

「……また何か面倒な話を持って来たんじゃないか……」

「ちよつと小遣い稼ぎの話を」

「聞きましょう！」

お金になるというなら是非とも聞こうじゃないか。今の私には軍

資金が必要なんだ。

鼻息荒く身を乗り出すと、ジョセフさんは苦笑しながらテーブルの上にあげていた椅子を二つ降ろし、一つを私にすすめた後、もう一つに自分の腰を下ろした。

「何を頼みたいかっていうと、出前なんだけど」

「出前？」

「うん。研究所まで、昼食のデリバリー。この店ではそんなサービスやってないのは知ってるから、これはミヤさん個人に頼む仕事になるんだけど」

「ええっと、どういうことですか？」

店の料理を研究所に運べということなのだろうか。

私が要領を得ない顔をしているのを見て取り、ジョセフさんはちよつと考えた後に言い方を改めた。

「つまりね。毎日一食分、弁当を頼みたいんだ。材料費、手間賃、その他諸々こつちで出すから」

「ああなるほど……ってお弁当！？ ジョセフさんが食べるんですか？」

「あははは。ミヤさんの弁当はすごく魅力的だけど、僕のじゃないよ」

でもそれもいいなあ、僕のもついでにお願いしようかな、とジョセフさんは笑った。

しかし、私にこの話が来る経緯がわからない。研究所には食堂があるし、周辺にも飲食店がいくつかあったはずだ。なんでわざわざ。

「寝食放り出して、ムキになって仕事してる馬鹿に、なんとか栄養とらせないといけないからね。せめて昼ぐらいはちゃんと食わせな

いって事で、苦肉の策」

「……………えーと」

それはあれか。私が、奴にポロっと言っちゃった、” 仕事に打ち込む人は結構好き” 発言のせいかな。ていうか、いくつか述べた中で一番ズレてた答えだった気がするんだけど。よりにもよって、あれをひろい上げちゃったのか。

呆れてあんぐり口を開けた私の肩を、ジョセフさんはポンと叩いた。

「まあそういうわけで、できれば弁当と一緒に顔も出してやってよ。そろそろあいつも、体力的にブっ倒れそうな頃合だし。昼の忙しい時間帯にかかりそうだから、両親に話は通しておくよ」



翌日。私は重たいランチボックスをぶら下げ、魔道研究所前に立っていた。

「あー重い……直接持ってっちゃっていいんだろうか、これ」

一応守衛さんに挨拶すると、話は通っているので直接どうぞと言われた。ので、遠慮なくずんずん進む。

今の時刻はお昼よりちょっと早めだ。バイト先の店はお昼時の込み具合が半端ないから、さっさと弁当を届けてそれまでに戻りたい。

急ぎ足で廊下を歩いていると、アーデインの部屋の前にジョセフさんが立っていた。

「どうも。配達に来ましたよ」

「やあ、いらっしやい。手間かけさせちゃってごめんね」

「ええまあ、何というか、私のせいという気もしなくもないですし……今、どんな状況ですか」

「直接見てもらうのが一番手っ取り早くていいんじゃないかな」

ジョセフさんはそう言うのと、背後の扉を軽くノックしてから開けた。

「所長。そろそろ昼です、休憩しましょう」

「俺はいい。お前は勝手に食いに行け」

部屋の奥から、感情の籠らない無愛想な声がかえって来て、ジョセフさんは”ほらね”と目で私に語りかけた。

どれどれ、とジョセフさんの横から部屋を覗き込む。

アーディンはこちらに背を向けていた。何か術式らしきものを、紙にガリガリと書きなぐっている。

「そうも行きませんよ。こっちは貴方の健康管理も仕事のうちですから。適当に固形食糧かじっておしまい、なんてのをずっとやっていると死にますよ。それに睡眠もあまりとってないでしょう」

「うるさいな。構うなど言っているだろう」

振り向かず、アーディンは唸るような声をあげた。うわー機嫌悪い。

何というかこれは、仕事に打ち込むというより、仕事に逃げてる、といった感じじゃなからうか。顔が見えないからあれだが、心なしか痩せてる気もするし。

そんなアーディンの対応に、ジョセフさんは物凄く楽しそうに口元を吊り上げた。

「そんな事を仰っていいんですか？ 多分、後で物凄く後悔される事になると思います」

「……なんなんだお前。しつこいぞ！」

「貴方の心情を慮っての発言なんですけどね。後でいくら怒っても聞く耳持ちませんよ？」

「う、る、さいなもう！」

”う、る、”の時点で曲線を描くアーディンの手がぶれ、術式が歪む。それにキレて、残りの”さいなもう！”を怒鳴りながらアーディンは振り返った。うわ、目の下に隈できてる。華やかな美形、からやつれた美形にクラスチェンジか。それはそれでキャーキャーいう娘がいそうだが。あ、目が合った。

私を見たアーディンは、目を見開いてフリーズした。

そして、ジョセフさんはにつこりと満面の笑みのまま、私からランチボックスを取り、顔の横に持ち上げてみせた。

「じゃ、そういうことで。ミヤさんお手製の弁当は、僕がありがたく頂きます。それでは」

「何!？」

「いやあ役得だなあ、あはははは」

ジョセフさんは笑いながら私の背を押し、部屋を出ようとした。片手にはランチボックスを捧げ持ったまま。この人、なんでこんなに楽しそうなんだ。

「ちょ……待てお前!!」

アーディンはバネのように飛び上がり、一歩こちらに足を踏み出した。が、次の瞬間、口元を手で押さえて立ち止まる。

「う」

みるみる顔面から血の気が失せ、グラリと上半身が傾ぐ。私は咄嗟にアーディンに駆け寄って支えようとしたが、所詮女の細腕。ぐたりと倒れてきた体を支えられるはずもなく。

「重っ！！　ちょっと、何！？　アーディン！？」

「あらら、貧血起こしたみたいだねえ。寝不足のくせに急に立ち上がったから」

べちよりとアーディンの体に押しつぶされかけた所を、ジョセフさんが引き取ってくれる。

アーディンは顔面蒼白のまま意識を失っていた。こう見ると、このやつれ具合が、ちよつと陰のある男前を演出している感じに見える。なくもない。こうなった原因を考えると脱力ものだが。それにしても貧血って。不摂生するからだ、馬鹿者。

あとで起きたらゲンコツでも一発くれてやろうと心に決めていると、ジョセフさんが苦笑しながら肩をすくめた。

「しょうがないから医務室に運ぼうか」

そうしますか。

◇12

意識のない人間は、すごく重い。

当たり前だが、私では成人男性であるアーディンを運ぶことはできない。というか抱え上げることすら無理だ。子供だった頃は、頑張れば担げたのになあ。

仕方ないのでジョセフさんともう一人、廊下を歩いていた研究員さんを捕まえて、アーディンを医務室に運んでもらった。

「疲労でしょう。栄養と睡眠をとれば回復しますよ」

医務室につめていた医療スタッフさんの言葉に、そうだろうねえと深く頷く私たち。

回復魔法は、本人の体力を引きずり出して怪我を治すというのがメインの魔法だそうで、ここは普通に食事して寝ろという診断結果だ。さもありなん。

「丁度いいから、今日はここに寝かせとこう。悪いんだけどミヤさん、所長がフラフラ動かないように見張っててくれる？ 君の言う事なら素直に聞くだろうし」

「それは構いませんが、店の方に連絡を入れないと」

「ああ、そうだね。僕のほうから入れておくよ。ごめんね。こいつ、思いつめると一つのものに集中して他のことシャットアウトした挙句、結局倒れるんだよね」

そういえば、学生時代にも勉強にのめりこんで倒れたとか言ってたな。一種の逃避行動なんだろうか。

ジョセフさんはこの後、アーディンが倒れた穴を埋めるべく走り回らねばならないそうだ。医療スタッフさんと二言、三言会話を交

わした後こっちに戻ってきて、これ、と私にランチボックスを渡してきた。

「起きたら食わせてやって。僕が食ったらぶん殴られそうだし」
「了解です」

頷きつつ回収。

なんだかんだいいつつ、ジョセフさんは最初からお弁当を食べる気はなかったんだろうと思う。食べるそぶりを見せ、アーディンを部屋から引っ張り出すエサにしたといった所か。引っ張り出す前に倒れちゃったけど。

「じゃ、後はよろしく」

ちらりとアーディンに目をやって、相変わらずの裏の読めない笑顔を浮かべた後、ジョセフさんは部屋から出て行った。医療スタッフさんも、何かあったら呼んでくださいと言いつつ残して別室に引っ込む。

私はスツールをズルズルと引っ張って、アーディンが寝かされている寝台の横まで移動させると、どっこいせと腰掛けた。

やることもないので、目の前で寝ているアーディンをぼーっと観察する。

半月ほど無茶な生活をしていたせいか、顔色は悪いし目の下に隈もある。なのにベースが男前すぎて、それらが退廃的な雰囲気を出すエッセンスにしかなくてない、というのはどういふことだ。私が同じ状況に置かれれば、二目と見られない顔になるだろうに。納得いかん。

そういえば、高校時代のクラスメイトが、美形は何やっても美形

なのよおお！ と熱く語っていた。当時、そんなわけないだろうと心の中で笑ってごめん、級友よ。それを体現してるのがまさに今、目の前にいるよ。

つやつやしたシルバールブンドの前髪が、閉じた目にはらりとかかっている。これ、目を開けたら髪が入りそうだな。こっちの世界の人も結膜炎になったりするんだろうか。

そんな事を考えながら、私はほぼ無意識にアーデインの額に手をやり、目にかかる髪を払いのけた。

「ん？」

私の指が触れた瞬間、アーデインがぴくりと身じろいだ。

「起きてるの？」

アーデインの返事はない。私の気のせいかと思ったが、手をあてたまま、じつとその整った顔を観察していると、じわじわとアーデインの目尻が赤くなってきた。おいコラ。

「やっぱり起きてるんじゃない！！」

額に当てていた手をひっくり返し、ゴツンゴツンと握りこぶしで頭をノックする。痛い痛いといいながら、のっそりとアーデインが身を起こした。

「いつから狸寝入りしてた」

私の問いに、きまり悪げにアーデインは視線をそらす。

「……ここに寝かされてすぐ、かな……」

15分くらい寝たふりしてたってことか！

「なにやってんのよ。それって、みんなに運ばれてすぐ起きると格好悪かったから？」

「そういう訳じゃないが……」

「じゃないが、何？」

口ごもるアーディンに問い返すと、ボソボソと小声で返答した。

「すぐ起きたら、その……ミヤが、その場で帰りそうだったから。どうせジョセフは仕事が残ってるし、うまくすれば二人つきりになれるかな、と」

「えええ。ちよつと今、結構引いた」

無駄にそういうとこだけ計算高い！！

女の子が同じこととしてたら、健気だなあ可愛いなあと思うけど、男にやられると引いてしまう不思議。

私がスツールごとちよつと下がると、アーディンはあわてたように、それ以上は何も考えてないと訴えた。それ以上ってなんだ、それ以上って。

しかし常々思っていたが、アーディンは下心がダダ漏れすぎる。子供の頃はここまで露骨じゃなかったのに、大人になる過程で何があったんだ。もうちよつと隠せ。

「そもそも、倒れる前に自分でコントロールしなさいよ。何で倒れるまで仕事するの。私が余計なこと言ったせい？」

私がそう言うと、アーディンはちよつと驚いたように瞬きをした後、ゆるく首を振った。

「そうじゃない。……確かに、きっかけはミヤの言葉と言えなくもないが」

アーディンが私のバイト先の店を訪れたあの後、アーディンなりに色々と考えたらしい。

包容力云々を含む己の性格は、そう簡単に改善できない。ならば、とにかく実践できるものからやってみよう。まずは手始めに仕事に打ち込んでみよう、日ごろ管理職に追われ、手付かずになっていた研究を終わらせてみよう……と思ったのだ、とアーディンは語った。

「いざやり始めてみると、ほかの事に目がいかなくなった。自分でもまずいとは思ってるんだが、何というか……自分の中で設定したラインに到達できないと、むきになるんだ」

なるほど。たしかに私の言葉がきっかけで始めた事ではあるが、途中から他の事がどうでもよくなるほど熱中してしまった、と。

何のことはない、そこにいたのは、ただの研究馬鹿だった。

「さっき部屋に来たミヤの顔を見て、一気に現実に引き戻された」

「なんていうか……馬鹿よねえ。結局周りに迷惑かけてるし。そんなとこ、ハロルドさんに似なくてもいいのに。本当、馬鹿よねえ」

「分かってるから馬鹿馬鹿言うな」

「まあいいけど。現実に引き戻されたついでにこれ」

横に置いてあったランチボックスを引っ張りあげる。

「さっさと食べて栄養補給して、そのあと一眠りすること。ほら！」

私は包みを解いて、ボックスごとぐいとアーディンの目の前に突

き出した。

入っているのはサンドイッチのようなものだ。ちゃんとした食事を摂っていないと聞いていたので、とにかく肉やら野菜やら、目に付くものをこれでもかとパンに挟んでおいた。和風にしたかった所だが、朝から店の仕事もあったし、なによりこっちは米らしきものがないから仕方ない。

アーディンはボックスを受け取ると、まじまじと中を見つめ、その後ちらりとこちらに視線を走らせた。

「何？ 一応食べられる味だから大丈夫だと思うけど」

「……いや、その。なんで急に弁当を持ってきてくれたのかと思って」

「ああ、頼まれたから」

「は？」

「ジョセフさんが店に来て、アーディンが滅茶苦茶な生活してて倒れそうだから、栄養補給できるものを作ってくれて頼んできたの」

「……あの野郎……」

アーディンが低く呟くのを見て、これは黙ってたほうが良かったんじゃないかと気がついた。貴方のために作ってきたのよ！ とか言って、ちよつと夢見せてあげた方が元気になったんだろうか。でもそれって私が悪女みたいだし。やはり真実は告げるべきだろう。

「毎日頼まれてたんだけど、嫌なら明日からやめ……」

「嫌とは言っていない！！ ……ああくそ、奴の手のひらの上で踊らされてる自分が嫌だ」

アーディンは私の発言をぶった切り、片手で己の顔を覆ってうめいた後、ヤケクソ気味にバクバクとサンドイッチを食べだした。食

欲はあるようで何よりだ。

「お茶飲む？」

「飲むよこん畜生！」

「アーディン口悪い」

「……ごめん」

◇13

何だかんだで、私のお弁当の配達が続いていた。

この前、滔々と言いつ聞かせたおかげか、アーディンの常軌を逸していた仕事への傾倒っぷりはおさまっている。普通に自分で生活パターンを舵をとれるようになったわけだ。だったらもう、お弁当はいらないんじゃないかと言ってみたら、ものすごい勢いで継続を希望された。

まあ、私としても臨時収入になるのだから、そう悪い話でもない。という訳で、私は今日もランチボックスを引っ提げ、魔道研究所に足を運んでいる。

「こんにちは、あの」

「あーいつも御苦労さま！ 入っちゃって入っちゃって！」

いつも一応守衛さんに声をかけるのだが、ほぼノーチェックで素通りだ。

本来なら、この研究所の所長であるアーディンの部屋に行くには、結構面倒な手続きを踏まなくてはならない。が、配達は連日の事なので、もうすっかり顔パス扱いになっているのだ。私としては楽でありがたいけど、セキュリティ的にいいんだろうか、これ。

まあ何かあっても責任は私にはないか、と気持ちを切り替えて先を急ぐ。

そして目的地へと到着した私は、重厚な扉をノックし、いつもの如く一声張り上げた。

「まいどー、お弁当の配達にきましたー」

一拍おいて、扉の向こうでガタン！ と大きな音。さらにその少し後、ドザザザーと何かが雪崩れる音。それと共に部屋の主の、うわっという悲壮な声。……いったい何をやってるんだ。

ややあつて扉が開かれ、アーディンが中からぐったりしながら現れた。

「いつもすまない、入ってくれ」

「何か大騒ぎしてたみたいだけど、何が……うわあ」

中に足を踏み入れると、惨憺たる有様だった。中央の机にうずたかく積み上げられた書類が崩れ落ち、卓上を覆い尽くしている。さっきの雪崩音はこれか。

いつもはその机の上にお弁当を置いて配達完了なのだが、どうするんだこれ。

「……あれ、大丈夫なの？ て言うかお弁当どこに置けば」

「ああ、ちょっと待ってくれ」

アーディンはザカザカと大雑把に書類を手で寄せ、無理やり隙間を作った。

「ここに置いてくれていい」

「そんな扱いしていいの、その書類……並び順とかグッチャグチャになってるんじゃない」

「全部履歴書だ、順はどうでもいい」

ちょっと待て。こともなげに吐かれたセリフに、お弁当を置く私の手が止まる。

「それって外部者の私が目にしちゃまずいんじゃないの!？」 企業
秘密ってやつでしょ!」

「そういう部分は見えないように加工されてるから問題ない。特殊な魔力光を当てると浮き出るようになってる」

アーデインはそう言うのと、雪崩から一枚抜き取って私の目の前に差し出した。おお、確かに記録欄には何も書かれてない……何か、私の世界にあった、なぞるたびに出たり消えたりするペンを思い出す。

それにしても。

「その点は分かったけど、扱いがぞんざいすぎない？ 履歴書って事は、ここに就職希望してる人のものように」

「ここに回されてくるのは、お偉い方の子息やら息女のものだけだ。正直、使い物にならん」

「裏口就職用!？」

「一応国立だからな。できの悪い子供に何とかハクをつけたいと願う親にとって、就職口として丁度いいと思われるらしい」

「うわあ……よく聞く話だけど……そういうのって、採用されても仕事できないんじゃない」

「だから採用はほぼしない。言われるままに何でもかんでも雇っていたら、研究所の質がガタ落ちになるからな。だが、たまに見所のある者もないわけではない。それを見出すために、俺のところにこれらが回される事になる。……まあ、今回は総ハズレだ」

なんてことだ。ファンタジーな異世界にも裏口就職があるとは思わなかった。まったくどこも世知辛いな。

私は改めて、目の前に積まれた書類の山を見る。確かにこの量をチェックしてたらぐったりもするか。

「あー……大変だね……っていうか、アーディンちゃんと管理職っぽいことしてるんだ」

私がそう言うと、アーディンが無然とした表情でこちらを睨んだ。

「どういう意味だ。言っておくが、勤務時間内に俺がやっている事はほとんど管理業務だぞ。自分の為の研究なんぞはぼできない」

お。この流れは。

「だから早いうちからハロルドさんが引退したがつてたんだ。面白くなさそうだもんね、所長って」

「面白くなさそうって……」

今ならいける！ よし、聞きだすんだ私！

「そういえば、ハロルドさん引退して研究に没頭してるって言ってたよね。今どこにいるの」

何気ない会話にとっかかりを見出し、今だ！ と色めき立つ内心を押さえつつ、私はさりげなくハロルドさんの話題を切り出した。そう、私がここ数日、密かに聞きだすチャンスがうかがっていたのはこの一点。いずれハロルドさんの元へと赴き、自分の世界に帰してもらおうと目論む私には、彼の現住所が是非とも必要なのだ。しかし露骨に聞きだしては、私が帰りがたっている事をアーディンに悟られかねない。バレたら全力で阻止されるのは目に見えているので、話の流れでさりげなく聞ける時を待っていたのだ。

アーディンは、そんな私の思惑に気づくことなく答えを口にする。ふはははは、引っかったな。

「住居はカンドにあるらしいが」
「カンド」

カンド、カンド、カンド。私は心の中でその名を繰り返し、忘れないようにしっかりと刻み込んだ。

正直、こっちの世界の地理には明るくないので、カンドなる場所がどこにあるのか現時点ではサッパリだ。後で調べなくては。そこまで考えて、ふとアーデインの言い回しに引っかかりを覚える。

「……らしいって何。自分のおじいちゃんの事でしょくに」
「ほとんど家に帰っていないらしいからな。どこを飛び回ってるんだか」

「えええ」

それって、私が苦勞して訪ねていっても留守の確率が高いって事じゃないか。やばい、私の帰還計画が崩れる。

「け、研究って家に籠ってやってるんじゃないの？」

「自宅じゃスペース的に呼べないものを召喚したいらしい。あそこまでいくと、俺も理解できん」

「どんな巨大生物呼ぼうとしてるの!？」

おおい、マンモスとか恐竜とか呼びだそうとしてるんじゃないだろうな。別の意味で不安になってくるぞ。

「それ、放置してて大丈夫なの？　なんかヤバくない？」

「時々は休みを取って、様子を見に行ってる。今のところは大丈夫だ」

「今のところ……」

それは結果的に何もなかったから大丈夫だったって事であって、
今後大丈夫かどうかはかなり怪しいと思うのだが。

巨大生物なんか召喚成功できたとしても、その後どうするんだ。
暴れたら制御できないだろう。

「すごい不安になってきた。ハロルドさんにもう一度会う前に、何か事故とか起こすんじゃないか……」

「何だ、爺さんに会いたいのか」

意外そうなアーデインの声にギクリとする。

しまった！ 会うとかポロっと言っちゃった！ 全力で取り繕え、私！

「いや何ていうか！ 前回召喚された縁だし、こうやってもう一回この世界に呼ばれて来ちゃった以上、ご挨拶くらいはしたいじゃない！」

うう、我ながら苦しい。

だが、アーデインは他の事に想いを馳せているようで、私の言い逃れには食いつかなかった。その事に私がホッと胸をなでおろしたのもつかの間。アーデインの、いい事を思いついたといわんばかりの台詞に、私は凍りついた。

「そろそろ顔を見に行こうと思ってた所だ。俺と一緒に行けばいい」「は？ いや、それは！」

一緒に行っちゃったら意味がないでしょうがああ！
思わず大声で拒否しかけた私に、アーデインが眉をしかめる。い

かん、落ちつけ私。

「何か問題でもあるのか」

「あ、ある！ 急に行くとか、バイトに穴開けられない！」

よし、これはちゃんとした言い訳だ、理由としておかしくないはず。

私が何とかひねり出した答えを聞くと、アーディンは口元に手をあてて少し考え込んだ。

「……なら、ひと月先に調整しよう。移動手段はこちらで用意する。ミヤは勤め先から三日ほど休みをもぎ取れ」

「え、三日も休めないって」

「なら、三日間の代打をこっちで手配する。それで問題はないだろう」

「うっ」

「まだ何かあるか？」

アーディンがニヤニヤしている。くそう、ご挨拶ぐらいはしたいとか言っちゃった手前、やっぱり行きたくないんですーとも言えないじゃないか。何でこうなるんだ。

「どっ……同行者を要求する！」

「同行者？」

「アーディンと二人っきりで行動とか、いろんな意味で危ないし！できれば女性の同行者。それなら一緒に行くのも考えてもいい。っていうかそうでなきゃ行かない！」

「……………分かった。手配する」

チツと舌打ちが聞こえた気がするが、あえて聞かなかったことに

する。

ああもう、一人で密かに行動するはずが、なんでこうなっちゃうんだ。

◇14

こっちの世界の交通機関については、私も全てを把握しているわけではない。そもそも召喚されてこのかた、あまり遠出する機会もなかったので、この世界の住人が、長距離移動にどういった手段を用いているのか、ほぼ知らなかったと言っている。

でもまあ何となく、馬車とか、それに準じた乗り物に乗って行くのかなあと思っていたわけだ。

「何ですか、あれ」

出発当日。来いといわれていた魔道研究所の中庭。

そのど真ん中に、どーんと体長15メートルほどの羽根つき爬虫類が2体、鎮座ましましていた。でかい。

思わず眼前の生物を指差し、私の隣の人物に問うてしまったのは、当然の反応だと思う。

「ジャクリンちゃんとマデリーンちゃんよ」

私の隣に立つ美女イリアさん——私がゴネて、今回の同行者になってもらった——は、当然だと言わんばかりに落ち着いて返答をよこす。

「ははあ、名前から察するに女の子ですか。ってそんな事はどうでもいい！ 龍ですよねあれ！？ なんで龍!？」

「なんでって言われると困っちゃうんだけど。とっても大人しいし、賢い子たちだから大丈夫よ。あたくしたちを現地まで運んでくれるの」

二匹の龍の間に設置された、大きな箱らしきものが目に入り、まさかと思いつつも、それが確信に変わっていく。安定感悪そうなのだが、あれに乗るってか。

「いやそういう意味じゃなくて！ まさか、今回の旅って空路……？」

「そのまさかだ。何か問題があるか」

返事はイリアさんからではなく、背後からかえってきた。

「陸路だと三日で往復するのは無理だぞ。一人なら移送方陣で飛ぶんだが、あれは多人数を運べないからな……これは方陣よりも時間はかかるが、まあ移動手段としては早い方だ」

振り返ると、何やら大荷物を抱えたアーディンが立っていた。……なんとというか、美形と大荷物ってシニールだな。にしても、宿泊用の荷物にしては大きすぎないか、それ。

「何、それ全部持っていくの？」

「爺さんへの土産だ。資料やら文献やら、田舎じゃ手に入らないものを持ってこい、と毎回指定される」

そう言うアーディンは、遠くを見ながら達観したような表情をしていた。うへえ、毎回こんな荷物を運搬してるのか。孫使いが荒いな、ハロルドさん。

「それはそうと、こんな大きい龍、どこからつれて来たのよ。研究所にはいなかったよね」

「当たり前だ、こんな巨大な生物を飼育できる設備はここにはない。国有の運搬用飛龍を借りて来た」

「国有……そんなの私用で使うの!？」

「一般人はまず乗れないのよ、ラッキーだわ。ミヤちゃんにくつついて行くおかげで得しちゃった!」

思わず顔がひきつる。

つまりあれか。この龍は、VIP御用達セスナ機みたいなものか。

「元は爺さんが召喚した龍だからな。特別に、魔道研究所には無償で貸し出される事になっている」

「はあ!？」

ハロルドさん、何呼び出してるんだ!

すでにこのサイズの生物を呼び出していたとか……今回召喚をたくらんでる代物がどんだけのものなのか、もう想像するのも恐ろしい。

「質疑応答は移動しながらできるだろう、そろそろ行くぞ。乗れ」

「え、やっぱりあの箱に乗るんだ……酔いそう」

背中を押され、恐る恐る近づく。龍たちは静かにうずくまっていたが、巨大だというその一点だけで、どうしようもなく恐怖感を煽られる。ちよつと撫でられただけでこっちは潰されそうだし。

「あら、ミヤちゃん緊張してる?　だーいじょうぶよお、さあ乗って乗って!」

「うおお、引っ張らないで下さいよ!」

うきうきと楽しそうなイリアさんに、ぐいと手をひかれて箱の中に入る。

外から見た時は小さな箱だと思ったが、こうやって中に入ってみ

るとそうでもない。ああ、比較対象物の龍がでかすぎて小さく見えてただけなのか。

ぐるりと見渡すと、六畳ぐらいのスペースに、5、6人は座れそうな作りつけの座席。そしてぐるりと四方の壁にぶち抜かれた窓。足元はフカフカした絨毯が敷かれ、まさにVIP用！といったところか。

「あれ、アーデインは？」

続けて乗り込んでくるかと思ったら、来ない。

どうしたのかと窓から外を見てみると、二頭の龍の顔のところまで行って、何かを話しかけていた。

「……何してるんだろう、あれ。コミュニケーション？」

「ああ、行く先の説明をしてるんだと思うわ。ほら、地図見せてる」
げ、本当だ。

新聞紙ほどの大きさの地図を広げ、指さすアーデインを龍たちが覗きこみ、こくこくと頷いている。意思の疎通ができていいのか。

「……龍、頭いいんですね」

「知的にはあたくしたちとあまり変わらないわよ。喉の構造上、言葉は話せないみたいだけれど」

「マジですか。龍の前で変なこと言わなくてよかった」

「うふふ、そうね。機嫌損ねたら、振り落とされちゃうかも」

面白そうにさらっと怖いこと言わないでください。

「待たせた。出発しよう」

程なくして、荷物と共にアーディンが箱に入ってきた。と同時に、今まで静かにうずくまっていた龍たちが、よいしょと腰を上げる。

「ミヤちゃん、座ってないと転がっちゃうかも」

「え」

言われてあわてて腰を下ろしかけたタイミングで、ぶわさと巨大な羽音がして、地面がぐらりと傾いだ。

「のわあ！」

そう言う事はもうちょっと早めに言ってもらえたと有難かったよイリアさん。

危うく床をゴロゴロと転がりかけた私の腕を、間一髪でアーディンが掴んだ。

「ミヤ、あぶない」

「うおおびつくりした……ごめん、ありがとう」

そのまま座席に引き上げられ、座らされる。……のはいいが、なんでこんなにぴったりくっついた位置に座る必要が。落ちつかないにもほどがある。とにかく距離をとろう。

私は座ったまま、ズリズリとアーディンとの間をあけた。

するとすかさず私の腰にアーディンの手が回り、有無を言わさぬ勢いで引き寄せ直される。

「ちょ、何すんのよ、近い！ アーディン、手つきがオヤジくさい！」

「オヤ……っ、そうじゃない、誤解するな！ まだしばらく揺れるからじっとしてろと言うんだ！」

「信用できないから！ 揺れるってんなら椅子の背にかじりついく、この手をはなせ！」

ぺいっとアーデインの手を払いのけ、寄ってこないように威嚇する。

ふと気づくと、向い側に腰かけているイリアさんが頬杖を突き、生暖かい視線でこっちをガン見していた。ひいい、その目はやめて！

「うふふ、微笑ましいいったら。ミヤちゃんこっちいらっしやいな、あたくしが抱っこしてあげる！」

「いや、抱っこも勘弁して下さい……でもそっち行きます」

揺れる足もとに注意を払いつつ、反対側の座席に移動、着席。両手を広げて待ち構えていたイリアさんに抱きつかれたが、まあこれは振りほどくほどのことでもないか、とそのまま甘んじて受ける。視界の向こう側になったアーデインは、苦虫をかみつぶしたような顔で無然としていた。

「差別だ。……俺がちよっと抱えただけで怒るくせに、イリアならいいのか」

「いや、だってイリアさんは女性だし。根本的なところで違うでしょうが」

「うふふふー、いいでしょう所長。触り放題、頬ずりし放題。女性同士の特権よね」

「うお、イリアさんやめて下さいよ！ あ、でもいい匂いする。香水ですか」

「そうなの。お出かけするから奮発していい香水もってきたのよ。あとでミヤちゃんにもつけてあげる！」

「いや、私はいららないんで」

「ええー、そう言わずに」

ここぞとばかりにキャアキャアとはしゃぐイリアさんと、それにもみくちやにされる私。それを恨めしそうに見ていたアーデインは、聞こえるか聞こえないかの声でボソリと呟いた。

「……………そうか、女に生まれてれば」

「アーデイン、それ血迷いすぎだから」

「所長、さすがにキモいです」

何が悲しくて、空の上でこんな阿呆らしいやりとりを繰り返すわけばならんのか。

私たちを運ぶ龍は、カンドを目指しその後半日ほど空路を進んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1261m/>

アフターコール

2010年10月8日11時30分発行